好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究　Ⅳ

2021

近代博物館形成史研究会

例　言

1．本書は、平成 29（2017）年度から平成 31 年・令和元（2019）年度まで推進してきた「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」（基盤研究 B　研究課題番号 17H02025 研究代表　内川隆志）の継続研究成果である。

2．本書の執筆は、科研連携研究者、近代博物館形成史研究会メンバーの川村佳男（九州国立博物館）、新井端（熊谷市教育委員会江南文化財センター）による。

3．本書の編集は内川隆志（國學院大學博物館）がおこなった。

目　次

研究の概要…… 1

【論文】

松浦武四郎旧蔵の中国青銅器　　川村　佳男…… 3

國學院大學博物館蔵「六鈴鏡」
　一根岸武香遺愛の鈴鏡について一　　新井　　端…… 28

研究の概要

平成21(2009)年、東京世田谷に所在する静嘉堂文庫で、幕末から明治を生きた好古家松浦武四郎(1818 − 1888）の実像を具体的に明らかにできる新たな資料が出現した。私たちは、同年より静嘉堂文庫のご理解、ご協力の下これらの資料整理を敢行し、平成25（2013）年に目録を出版[1]加えて静嘉堂文庫美術館での展示によって、このコレクションが世に知られるようになった[2]。科研費を得て着手した平成22（2009）年の研究当初から掲げている課題として、武四郎コレクションを核として「近代博物館創設の揺籃期において、文化財行政制度の構築に多大なる影響を及ぼした幕末維新期から続く国内外の好古家の活動に関して考究する」ことをあげている。近代博物館制度、文化財保護制度が明治政府の号令一下、瞬時に整えられたかの如く評価されているが、実際には近代以前の学問を身につけた数多の好古家の尽力なくして実現できるものではなかったのである。これは、近代博物館形成史、文化財行政史のみならず、揺籃期におけるわが国の人文科学そのものの成り立ちを考える上でも重要な視点と考えたのである。加えて、彼らに影響を与えたH.v.シーボルト（1852 − 1908）等の外国人の存在があった事についても言及し、平成27（2015）年には、國學院大學において武四郎と古物を通じて交流した彼のコレクションや学問形成に大きな影響を与えた父P.F.v.シーボルト（1796-1866）のコレクションを有するヨーロッパの研究者を招聘し、よりグローバルな視点で明治初期の好古家、文化財を考える国際シンポジウム開催した[3]。平成28（2016）年には、オランダ・ライデン民族学博物館に収蔵されているP.F.v.シーボルトコレクションの考古資料調査を敢行し、その実像に迫ることが出来たのである[4]。

平成29年（2017）度から推進している「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」(基盤研究Ｂ　研究課題番号17H02025研究代表　内川隆志）では、日本近世史、日本近代史、ヨーロッパ近代史、ヨーロッパ考古学、中国考古学、日本考古学、博物館学、文化財学等の専門家による研究体制を整え、総合的観点から ① 近世後期の「物産会」から近代博物館制度、文化財行政の構築に到る歴史的・人的基盤を探る。② 好古家蒐集古物の調査研究と国内外における好古家ネットワークの研究の２点を柱に研究を推進している。平成29年(2017)度には、大英博物館が所蔵しているH.v.シーボルトコレクションの考古資料調査を敢行した。

平成30（2018）年、生誕から200年を迎えた松浦武四郎は、幕末の北海道を６回にわたって踏査し、さまざまな記録を残したばかりではなく、幅広い方面で多彩な活動を行った。そうした武四郎の多様な活動の中で、特に明治政府の官職を辞した52歳から晩年に至るまで熱心におこなった古物蒐集にスポットを当て、これまで知られることのなかった「好古家」としての武四郎を考究する公開研究会「松浦武四郎研究の最前線2018」を三重県生涯学習センターで開催し、その成果を『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅱ』として刊行した[5]。

平成31、令和元（2019）年度には、海外調査としてドイツイェーナ大学所蔵のH.v.シーボルトが同大学に寄贈した日本の貨幣コレクション約1000点の調査を敢行した。この貨幣コレクションの存在は古くから知られているものの、その実態は不明であったため、資料化を行い具体的な学術的価値を確認したのである。この調査報告に関しては令和２（2020）年度に公表する予定であったが、その数量の多さと同類古銭の特定の困難さに加え、コロナ禍による人材不足も相俟って順延を余儀なくされている。整理完結後、いずれ公表する予定である。

平成31・令和元（2019）年度には、研究の総括として「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅲ」として刊行した[6]。ここには、近代博物館形成史研究会メンバーによる５本の論考と平成29（2017）年度に実施した大英博物館所蔵H.v.シーボルトコレクション調査報告を掲

載した。さらに研究成果公開事業として國學院大學博物館において「古物を守り伝えた好古家 Antiquarians」（令和２年１月 25 日～３月 15 日）を実施し、令和２年３月７日には、シンポジウム「幕末維新期の好古家ネットワーク」を実施予定であったが、コロナ禍のためメンバーのみによる研究会として実施することを余儀なくされた。

本書に掲載した２本の論文は、静嘉堂所蔵の松浦武四郎コレクションのうち、中国の青銅器資料と國學院大學博物館が所蔵する根岸武香旧蔵六鈴鏡について川村佳男（九州国立博物館）と新井端（熊谷市教育委員会江南文化財センター）によるものである。前者は、明治中期に住友家第 15 代当主住友春翠（1864 － 1926）が中国古代の青銅器蒐集を開始する以前のわが国における青銅器蒐集の実態を考える格好の資料群であり、後者は武蔵国の好古家根岸武香（1839 － 1902）の旧蔵品であることを突き止め、その評価について考究したものである。

（内川　隆志）

註

（１）　内川隆志編　2015 『静嘉堂文庫蔵 松浦武四郎蒐集古物目録』

（２）　公益財団法人静嘉堂　2013 『静嘉堂蔵　松浦武四郎コレクション』

（３）　國學院大學博物館　2016 『國學院大學博物館国際シンポジウム・ワークショップ 2015　博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究報告書』

（４）　内川隆志編　2018 『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅰ　平成 29 年度科学研究費助成事業　基盤研究Ｂ　課題番号 17H02025

（５）　内川隆志編　2019 『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅱ　平成 29 年度科学研究費助成事業　基盤研究Ｂ　課題番号 17H02025

（６）　内川隆志編　2020 『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅲ　平成 29 年度科学研究費助成事業　基盤研究Ｂ　課題番号 17H02025

松浦武四郎旧蔵の中国青銅器

川村　佳男

はじめに

静嘉堂文庫美術館が所蔵する松浦武四郎旧蔵コレクションのなかには、少なくとも 10 件の中国青銅器が確認されている(1)。先行研究が明らかにしているように、20 世紀初頭には中国の古代青銅器が海外の市場へ大量に流出し、日本でもそれらのまとまったコレクションが形成されるようになった[冨田 2002 他]。規模では到底及ばないが、江戸時代から明治時代にかけても考証サロンや煎茶趣味の流行を背景に中国青銅器が輸入され、文人墨客のあいだで賞玩された[田畑 2016 他]。その実態は文献所載の情報から断片的に窺い知ることはできても、ほとんどの場合、青銅器がとうに散逸しているため、実物資料の裏付けをともなう解明にはなかなか至らなかった。静嘉堂が所蔵する中国青銅器 10 件は、旧蔵者の松浦武四郎が著した『撥雲餘興』首巻・二集、『蔵品目録』にすべて記録されているのみならず、まとまって現存する稀有な例である。江戸期から明治初期にかけて将来された中国青銅器のうち、著録所載の内容と実物との相互検証が可能な、現状における唯一の資料群として特筆される。

本稿では、これら 10 件のうち筆者が 2019 年 1 月 31 日に静嘉堂文庫美術館で熟覧する機会に与った鉏・盞・勺・鍾・長柄付き鐎斗・鐎斗・兕觥蓋の 7 件を紹介する(2)。同時に、今日の考古学的知見にもとづいた評価をそれぞれに試みる。最後に、明治初期以前に日本で受容された中国青銅器がもつ傾向の一端を松浦コレクションのなかから探り出し、20 世紀にわが国で本格的に形成されていく中国青銅器コレクションとの関連について初歩的な考察を行う。

１．松浦コレクションの中国青銅器各種

１-１．鉏（図１、２）

１-１-１．形状

高さ 10.4、最大幅 16.5 センチ。

平面は基本的に隅丸の長方形を呈する。ただし、長辺のうちの片面は真ん中に桃の実のような縦方向のくぼみをもつ。ほぼ平坦な底面から器壁が緩やかに立ち上がる。最大径は腹部にある。頸部は短くすぼまり、口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がる。

長辺のうち、桃の実状のくぼみのある面とは反対側にアーチ状の把手がつき、その上部には犠首がつく。犠首は内巻きの角をもつ動物の頭部を象る。把手は本体とは別作りで、次のような工程で本体と接続させる。まず、把手のパーツだけを本体よりも先に鋳造しておく。次に、本体と把手が完成時に接続するように、本体の鋳型のなかに把手のパーツを組みこみ、青銅の湯を流し込む。このように別作りのパーツを本体の鋳造時に接続させる鋳造方法を分鋳（先鋳）という[廣川 2015]。先鋳によって接続された把手の基部表面には、本体よりも把手との境界がより明瞭な青銅が取り巻く（図３）。

胴部のやや下寄りには縄紐を象った綯文がめぐる。綯文は桃の実状のくぼみに沿って分岐し、口縁部まで延びる(3)。綯文の縄目は突出した稜にすべて鏨で刻みこんだものである。

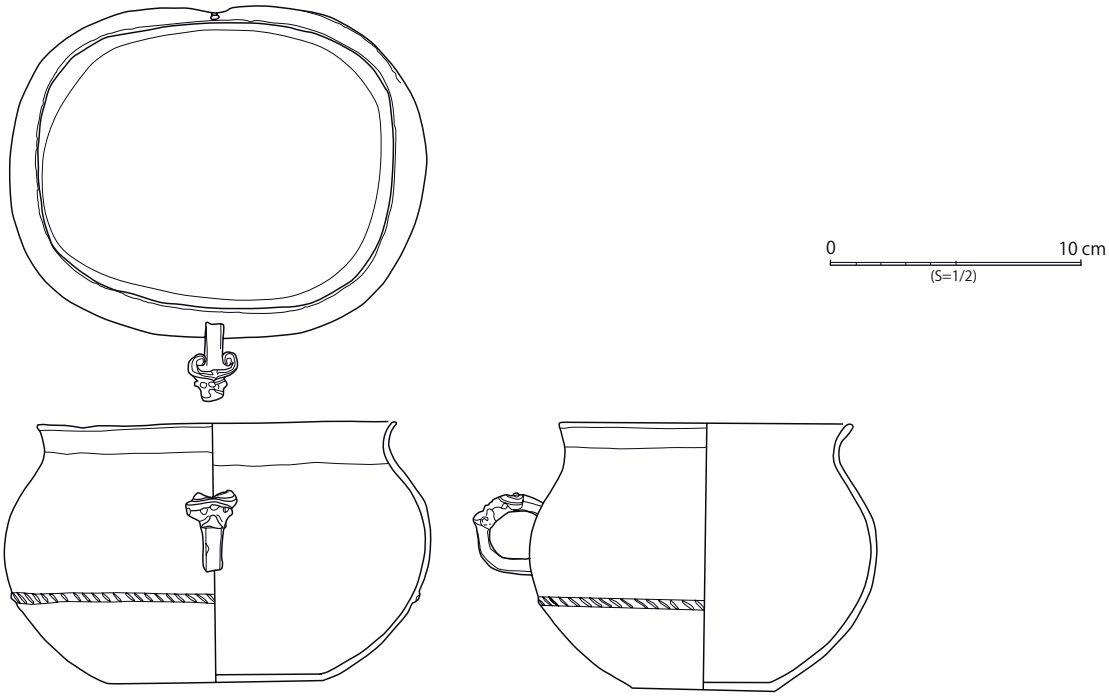


図１　鉈の実測図

図２　鉈の把手をもつ面（左）と反対面（右）

図３　鉈の把手基部にある先鋳の痕跡

1-1-2．評価

平面が楕円形ないし隅丸長方形で、長手の両面にアーチ状か環状の把手がつく、高さ10センチ前後の比較的小ぶりな青銅器を中国では『西清古鑑』以来、一般的に「舟」と呼んできた。しかし、その客観的な根拠はとくにない。「鉶」の自銘をもつ例が知られるようになると(4)、その器種名を用いることが普通になった。ちなみに松浦武四郎は『蔵品目録』と『撥雲余興』二集で「罌」の名称を用いている。

鉶は春秋時代に出現し(5)、戦国時代の前期にかけて中原地域だけでなく、その周縁地域にまで普及した[林1989、朱2009他]。文様、底部の支脚、蓋の有無はまちまちであり、器腹の深さも個体差がある。ただ、深手の例は春秋時代の比較的早い段階に多い[林1989]。武四郎旧蔵の鉶も深めなので、春秋時代の前～中期の型式と言ってよさそうである。犠首に表された内巻き角の動物の年代もおおむね矛盾しない[林1989]。

バリエーションの豊かな鉶のなかで形態のもっとも近い例を挙げるとすれば、武漢市博物館所蔵の「蔡太史鉶」だろう（図４）[武漢市文物商店1983]。器腹が深く、横断面が隅丸長方形を呈する基本的な器形のほかに、縄目を鏨で刻みこんだ綯文、犠首つきのアーチ状把手、把手の反対面にそなえた桃の実状のくぼみなど共通点が多い(6)。犠首は牛角をそなえた動物を表しており、反対側の面にある桃の実状のくぼみにも小さな環状の把手がつく。つまり、長辺の両面にそれぞれ大小２個の把手がある。武四郎旧蔵の鉶には把手がひとつしかなく、すべてが同じというわけではない。とはいえ、桃の実状のくぼみや綯文など、鉶のなかでもかなり特異な要素を共有しており、総じて両者の形態は極めて近いと言える。武漢市博物館所蔵例の表面にはアーチ状把手を挟んで銘文があり、「唯王正月，初吉壬午，蔡大（太）史奏乍（作）其鉶，永保用」と記す(7)。蔡国高官の太史である奏という人物が本器を作らせたことが分かる。武四郎旧蔵の鉶もあるいは同じ工房で製作されたものなのだろうか。将来の類例発見の増加、および蔡国の鋳造工房遺跡の発見・発掘に期待したい。

繰り返すが、武四郎旧蔵の鉶の型式は春秋時代前～中期のものと考えて問題ない。しかし、製作時期も春秋時代前～中期かと言えば、それほど話は単純ではない。結論から言えば、少なくとも一部は後世の人の手が加わっている。逆に、どの部分が本来のもので春秋時代まで遡るのか、発掘による確実な類例が出てきて比較調査を行うか、ＣＴスキャンなどの科学的な方法で調査をしないと客観的な判断を下すことは難しい。先に取り上げた蔡太史鉶も発掘資料ではない。武漢市文物商店が採集したものであり、出土地や入手の経緯など具体的な情報は何も報告されていない。

それでは、武四郎旧蔵の鉶のいったいどこに後世の人の手が施されているのか。

まず、表面が青銅器本来の様相とは異なる。何千年間も地中に埋まっていた中国古代の青銅器は、当然ながら時間相応の損傷や変色をともなって出土することが常である。同一の青銅器であっても、土中の環境条件、たとえば水分や塩分の含有量などの違いにより、錆を含む損傷や変色の程度、様相は部位ごとに変わる。しかし、この鉶の表面は一様に暗灰色で、鈍い光沢を放つ。これは青銅器の全面に漆や蝋を塗ったためと考えられる。青銅器の表面に漆や蝋の被膜を設けることで水や空気を遮断し、さらなる錆や損傷の進行を防ぐことができる。また、補修の痕跡を目立たなくさせる効果があったほか、時代に

図４　武漢市博物館所蔵「蔡太史鉶」

よっては漆や蝋の塗布による光沢そのものが審美の対象となり[8]、青銅器表面への塗布にいっそう拍車がかかった。とくに青銅器の鑑賞や収集が盛んになる宋時代以降、漆や蝋の塗布は青銅器のオリジナル部分と後補部分、あるいは真贋の見極めを難しくさせた。色漆、珐瑯の釉薬などで人工の錆を作り出し、青銅器の表面に貼りつけることもあった。武四郎旧蔵の鉇の表面にも、エナメル状の明るい緑をムラなく一様に発する錆がある。これを拡大してみると、錆の輪郭がどこも丸みを帯びており（図５）、いかにも溶かした蝋などを塗って着色した観がある。同時に、この鉇の口縁部や胴部には表層が剥離して、少し陥没した箇所が散見される（図６）。錆の進行で腐蝕した結果、青銅器の表層が剥離したのだろう。そうであれば、出土直後の本器の表面は色や凹凸の差が現状より顕著だった可能性がある。恐らくは出土後に錆や汚れを除去し、必要な補修を加えたうえで漆や蝋、または人工の錆を表面に塗布したのではないだろうか。もしもこの推測が妥当なら、武四郎旧蔵の鉇の器体は春秋時代に遡る蓋然性が高い。しかし、結局は先に記したように正式な発掘で出土した確実な類例との比較調査や、科学的な調査を経なければ、実態の客観的解明にはなかなか至らない[9]。

図５　鉇の表面に塗布された人工錆

図６　鉇の表面に散在する剥離痕

１-２．盞（図７、８）

１-２-１．形状

高さ 17.2、最大幅 28.5 センチ。

身と蓋からなる。身は横断面が円形で、やや横長に作る。底部はおおむね平坦で、その周縁に突帯がめぐる。胴部最大径は中位のやや上方にある。頚部は少しすぼまるが、口縁部は外折する。口唇部は厚く、平らに作る。

胴下部の３箇所に人形の支脚（人形三足）を均等に配する。それぞれしゃがんで両手を広げ、器身を背負うような姿で表される。人形三足は本体を鋳造した後、器体表面に鋳型を組んで鋳造している。こうして鋳造すると、完成時に三足が本体の器表と接続する。先に見た鉇の把手の分鋳（先鋳）と手順が逆である。この盞の三足で採用された分鋳を後鋳という[廣川 2015]。後鋳の場合、本体と三足の鋳型との隙間に流れた青銅の湯は、本体側により多く流れた痕跡を留める（図９）。後鋳時には鋳型の湯口が上で本体が下になるように置いたためである。

胴部中位から頚部にかけて３本の綯文付き突帯をめぐらし、その上下に文様帯を飾る。最下段は三角形の区画内に幾何学的な文様を充填した垂葉文帯が一周する。その上段の文様帯は上下で二分される。上半分には蟠虺文（Ｃ字形とＳ字形の蛇を複数組み合わせて作ったパターンの文様帯）を、そして、下半分には羽状文を組み合わせて作った菱形や横長の二等辺三角形で構成されたパターンを展開させる。

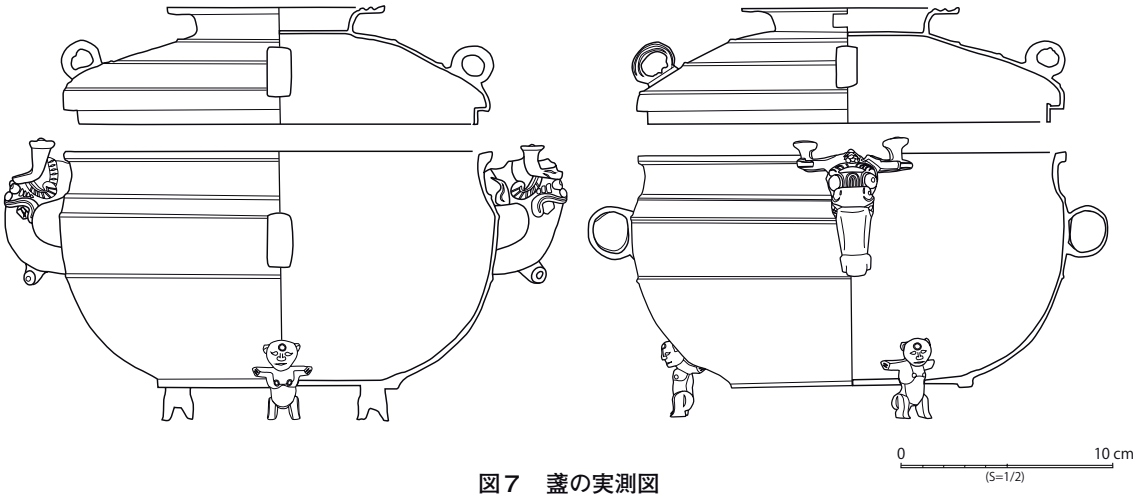


図７　盞の実測図

図８　盞

図９　人形三足の基部にある後鋳の痕跡

図 10　把手の基部にある後鋳の痕跡

図 11　蓋に施された文様

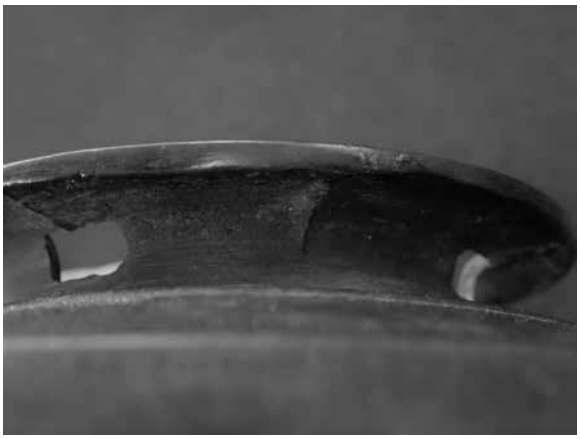


図 12　蓋の持ち手裏側に残る鋳バリ

その上段にある幅の狭い区画には横向きの三角形と隅丸長方形を連続展開させた文様帯を、最上段には蟠虺文帯を再び配置する。これらの文様はあらかじめスタンプ状の施文具に彫りこんであり、鋳型の内壁に一定の間隔でスタンプ状施文具を繰り返し押しつけ、文様を転写させている。

胴部から頸部にかけて、一対の把手（耳）がつく。把手上部は龍の頭部を象る。その一対の角は垂直に立ち、頂部がキノコの傘のように円く広がる。器壁に接する把手基部の内側を見ると、あらかじめ器壁の上下に出ほぞを設けていたことが分かる。これらの出ほぞを利用して把手の鋳型を組み、後鋳によって把手を本体に固定した。本体と把手の鋳型との隙間に流れ出た青銅の湯は、後から覆いかぶさることになった本体との境界のほうが把手との境界よりもはっきりと視認できる（図 10）。

胴部には把手のほかに環形の一対からなる鈕がつく。三足、把手と同じように後鋳で本体に付ける。

蓋は笠状に周縁から中央に向かって膨らむ。中央にはラッパ状に開く持ち手があり、その内側にある蓋上面はほぼ平らである。持ち手の側面４箇所にほぼ正方形の孔が開く。蓋の上面のうち、持ち手の外側は同心円状にめぐる綯文の突帯によって３つのスペースに区画される。これらのスペースのうち外側２つ分には蟠虺文帯がめぐり、もっとも内側のスペースには垂葉文が放射状に配される（図 11）。持ち手の内壁、および内壁に囲まれた蓋の上面にも蟠虺文が充填される。

蓋周縁の３箇所には環形の鈕が均等につく。後鋳によって、蓋に固定されている。

蓋の持ち手の外壁には鋳型と鋳型の隙間に流れこんだ青銅の湯が冷えて固まった鋳バリが見られる（図 12）。この鋳バリの数を通して、蓋の鋳造時に使用した外型は８個だったことが知られる。身に残された合範線も同数である。身の鋳造にも８分割された外型を使用したことが分かる。

1-2-2．評価

盞とは春秋時代から戦国時代の前期にかけて現在の湖北省・河南省鄭州市以南で流行した彝器の一種である。短い三足、一対からなるアーチ状ないし環状の把手、蓋を必ず伴う。通常、蓋の中央にはラッパ状に外反する持ち手がつく。三足、把手、持ち手は趣向を凝らした意匠のものが多い。また、身と蓋に環形の比較的小さな鈕を均等に配し、さらに、蟠虺文・垂葉文を主体とする文様帯をスタンプ状工具で施すことが一般的である。

自銘器は「盞」のほかに、「盂」「皿」などの例が知られている[10]。また、発掘報告書では「敦」と記載されることも少なくない。しかし、盂・敦は別の形態的特徴をもった器種名としてすでに定着しており、これらとの混同を避けることが望ましい。自銘の例が多い盞と呼称することがやはり理にかなっている。

武四郎旧蔵の盞は文様の意匠のなかに、たとえば横向き二等辺三角形と隅丸長方形で構成される文様帯など、いくつか個性的なものが見受けられる。しかし、文様の主体を占める蟠虺文・垂葉文・羽状文は春秋時代中～後期の鼎・盞・簠などが備える典型例である。先端がキノコの傘のような角をもつ龍の意匠の把手は、河南省新鄭市興弘 35 号墓で出土した盞にも見られる（図 13）［河南省文物考古研究所

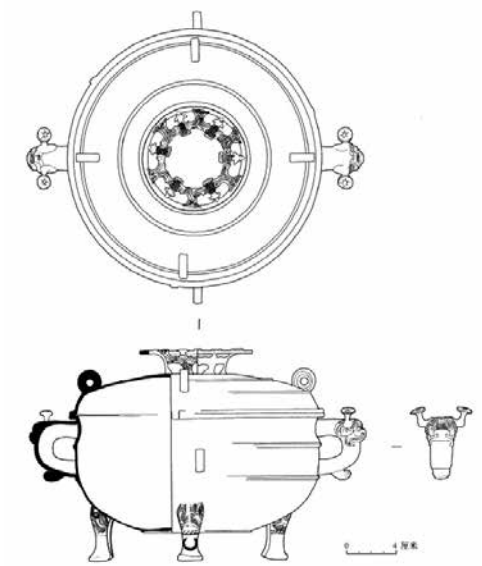


図 13　盞（河南省新鄭市興弘 35 号墓出土）

図 14　鉶（河南省新鄭市李家楼出土）

2007]。人形三足と同形の事例は見当たらないが、1923 年に河南省新鄭市李家楼で出土した鉶の三足は形態が比較的近い（図 14）[河南博物院・台北国立歴史博物館 2001]。獣面人身の像が跪いて両腕を広げ、器身を背負っている。以上のことから、武四郎旧蔵の盞は河南省鄭州以南から湖北省にかけて集中的に出土する、春秋時代中～後期の青銅器の形態と共通することが明らかである。製作技法、たとえば三足や把手を本体に接続する方法や、スタンプ状工具を用いた施文方法なども同時期、同地域の青銅器と比べてとくに矛盾しない。

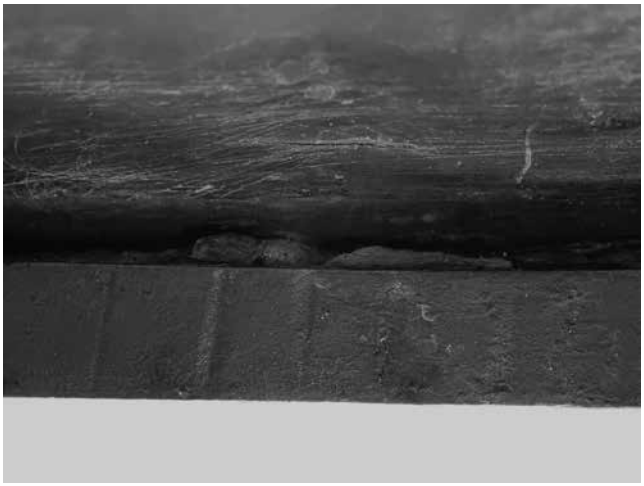


図 15　蓋裏の周縁にめぐる板状突帯

ただ、武四郎旧蔵の盞のうち、少なくとも蓋は後世の人為が加えられ、本来の形態を留めていない。盞の蓋の縁辺はハットの鍔のように平坦面が作り出される。さらに身の口縁部に載せたとき、脱落やずれを防ぐため、平坦な縁辺の外側に歯のような突起を均等に配し、下に突出させている（図13）。然るに、武四郎旧蔵盞の蓋にはこれらの特徴がない。脱落を防ぐ装置として、蓋裏の縁辺近くに円圏状の板金をめぐらし、身の口縁部の内側に落としこむ仕組みを採用している（図７）。この種の仕組みを中国考古学では「子母口」という用語で表す。目下、子母口を採用した例は盞にはないものの、ほかの器種の青銅器に目を移せば、遅くとも戦国時代の前期には例がある。しかし、この盞の蓋が原形を留めていないと筆者が見なす根拠は他にもある。

蓋裏縁辺のやや内側にめぐらせた板金をよく見ると、工具で鍛いて形を整えた縦線状の痕跡が連なる（図 15）。戦国時代の子母口用の突起は蓋と一括で鋳造するため、このような鎚鏨による鍛き目はない。加えて、図 15 の板金の上方には蓋裏の青銅とは異なる色の物質で板金と蓋とを接着している様相が見て取れる。蓋の表面を見てみると、ほぼ全体に漆が塗布されているが、蟠虺文が比較的はっきり見える

部位と、そうではない部位とが混在している（図 11）。後者はとくに蓋の縁辺に集中している。

以上の観察結果に基づけば、武四郎旧蔵の盞蓋は縁辺の大半が円圏状の板金を含めて後補であると考えられる。X線を透過させれば、予測されるこの様態は恐らく容易に可視化されるだろう。漆は蓋だけでなく、器身にもほぼ全面に塗布されている。もしかしたら肉眼観察では捉えにくい補修の痕跡が、塗膜に覆われた器面に隠れている可能性も否定できない。

1-3．勺（図 16、17）

1-3-1．形状

全長 29.2、口径 10.4 センチ。

丸底の頭に長い柄のついた杓子である。頭と柄は内湾しながら接する。くぼみは頭だけでなく、柄の末端近くまでつづく。そのため、柄の横断面は緩やかなU字形を呈する。縁は全体的に平滑に作られ、２ミリ程度の厚さをもつ。末端部の縁だけ他の部位よりも厚くなる。頭の随所に四角いスペーサを視認することができる。また、１箇所ではスペーサが脱落して空いた孔も見られる。このことから、本作は鋳造で成形されたことが分かる。

柄の外面底部の後方には小さな環状の突起を設ける。突起の基部が広がりながら本体と接しているため、分鋳で接着したものと考えられるが、先鋳と後鋳のいずれによるものかは判断できない。

頭の左後方の口縁部に欠失がある。内外全面で鈍い光沢を均等に放つことから、出土後に錆を落として蝋を塗布していることが予測される。本来の表面の様態を示唆する痕跡は、蝋の塗布層を透かして辛うじて視認することができる。内外面ともに緑色の錆に加えて、赤系の色を呈する錆か付着物の痕跡が目立つ。

1-3-2．評価

漢時代の青銅製杓子は、形態にいくつかのバリエーションのあることが知られている。そのうち、本例のように丸底で比較的浅い作りの頭の後部から長い柄がやや角度をつけて伸び上がり、頭と柄の内側が連続して刳りこまれたものを勺、あるいは斗と呼ぶ。いずれの自銘器も存在するので、漢時代からどちらの呼び方もあった［孫 2011、363 頁］。古く『重修宣和博古図録』（以下、『博古図録』）には「匏斗」の名称で記載されているように、その形状はあたかもヒョウタンの実を断ち割ったかのようである。

その形態から容器のなかの液体を掬い取る用途をもっていたことは容易に想像がつく。掬い取る液体は煮物料理や酒などさまざまだったようで、実際、勺は鼎・釜などの調理具や酒器である温酒尊など幅

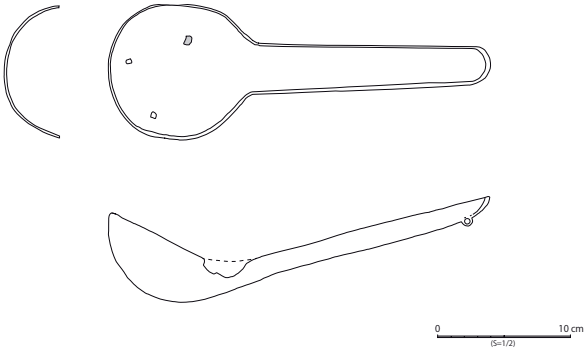


図 16　勺（実測図）

図 17　勺

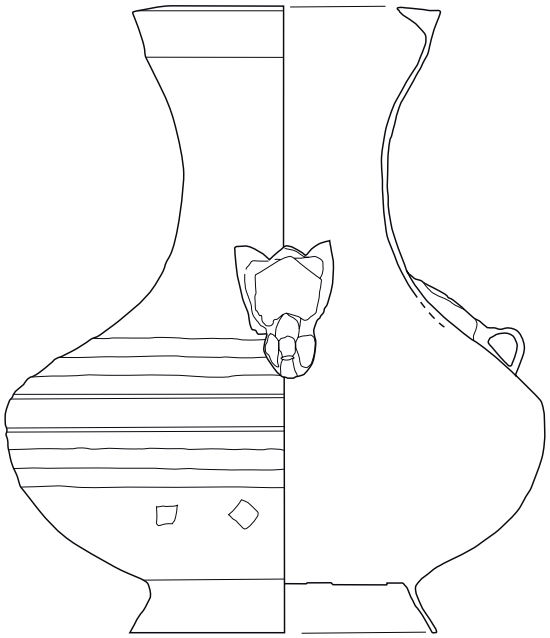
広い器種に伴って出土している。

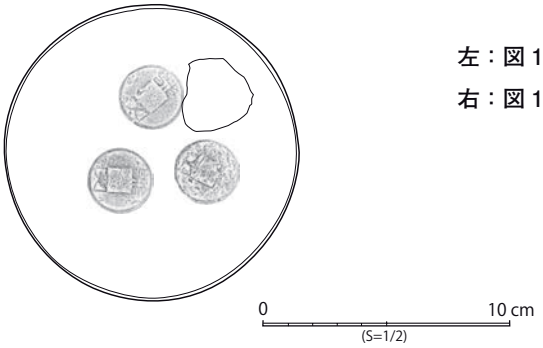
柄の外面底部の後方に小さな突起をもち、柄の末端部がほかの部位よりも目立って厚く作られる例は、例えば河北省満城県中山靖王劉勝墓、江蘇省邗江県「妾莫書」木槨墓などから出土している[11]。出土したこれらの類例の年代は、前漢中期から後期にかけてとおおむね報告されている。本作は出土後に錆を落とし、表面に蝋を塗布するなど後世の人為が加えられているが、前漢中期から後期にかけて製作されたものと考えてよい。

1-4．鍾（図 18、19）

1-4-1．形状

高さ 24.4、最大径 22.2 センチ。





左：図 18　鍾（実測図）
右：図 19　鍾

壺形の青銅器で、算盤玉のような形状で張り出した腹部に最大径がある。最大径の部位の上下には凹線をめぐらし、区画帯を設けている。さらにその上下には、匙面状の起伏を３段連続でめぐらす。中国考古でいう「瓦稜文」である。腹部の下方には四角いスペーサが認められる。外型と内型を組み合わせて鋳造したことが知られる。

腹部の下に高台があり、外に開く。底部はほぼ平坦で、外面底部には五銖銭が３枚鋳込まれて突出す

図 20　鍾の底部と高台

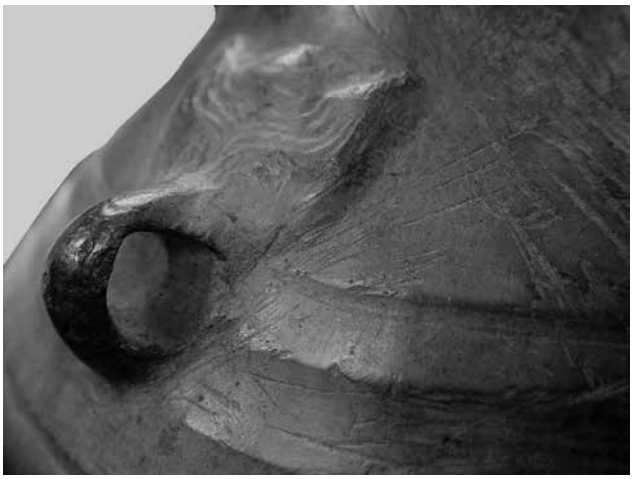


図 21　鍾の鋪首

る（図 18、20）[12]。五銖銭は高台の内型上面にあらかじめ埋め込んで鋳造したか、高台内型と器身内型のあいだにスペーサとして置いた可能性がある。

肩部の左右両側には獣面を象った鋪首がつく。鋪首とは持ち手となる環を固定するための部位である。獣面の口の部分が突出し、そこに孔が横方向に貫通する。この孔に環を通して固定することで、あたかも動物が環を銜えているように作る。本作の環はすでに欠失している。しかし、両側の鋪首とも環を通していた孔の上方が摩滅していくぶん細くなっていることから、相応の長いあいだ、環で持ち上げられた可能性がある（図 21）。本作の鋪首の獣面がどのような形状なのかは鋳上がりが拙劣のうえ、摩滅も著しく判然としない。ただ、上縁が三叉状に突出し、左右の突出部から中央に向かって３、４本の凸線がＳ字状ないし逆Ｓ字状に表されている。片面の鋪首には、この線の両側に細長い目の表現がある。もう一方の鋪首には、目の表現が認められない。

頚部は長く、中位でいったんすぼまるが、口縁部に向かって外に開く。頚部と口縁部のあいだには稜線がめぐり、両者を区画する。口縁部は途中で内折し、その上面、つまり口唇部は平滑に作られる。口唇部は若干傾斜していて、内側のほうが外側よりもやや高い。口縁部の縦断面は三角形を呈する。

表面に漆か蝋を塗布している。ただし、底部外面、器体および高台の内面には及んでいない。そのため、これらの部位はほの暗い光沢を帯びることなく、出土後本来の様態を留めている。底部には孔が開いていた痕跡があり、可塑性の物質で補填されている。高台の側面下方に１箇所、鋳掛による補修の痕跡がある。高台の下縁面は平坦で、漆か蝋の塗布は及んでいない。明緑色の比較的新しそうな錆が点状に分布する（図 20）。全体的に錆による損傷が相当進行していたようで、漆か蝋の塗布層を透かして、脱胎による青銅表層の剥離した痕跡が所々に見られる。外側に膨らんだ錆を除去したためか、または製作時における表面の調整痕なのか、きさげのような工具で粗く切削した痕跡も随所に認められる。

松浦武四郎の入手前後には花器として転用されたようで、花を活ける錫製の円筒を伴い伝わっている。口縁部には工具で後から開けた円孔が左右に並ぶ（図 22）。そのうち一方の孔の周囲には、孔の適正な位置をなかなか決めかねたのか、少し穿っては取りやめた孔の跡がいくつか散見される。

1-4-2．評価

本作と同形の壺型青銅器は永建元年（126）の自銘器が『西漢古鑑』巻三十四に著録され、漢時代に鍾と呼ばれていたことが古くから知られていた。「壺」の自銘器も存在するが、壺も鍾も形態上の区別はできない[13]。

鍾のなかでも腹部が扁球形を呈し、中位がすぼまる長い頚部をもつ例は後漢中期から後期にかけて集中する。なかでも、端部が内折して横断面が三角形を呈する口縁部、鋳上がりが拙劣で意匠の形態が不明瞭ながら、上縁の左右両端から中央にかけてＳ字ないし逆Ｓ字に施された平行線文をもつ鋪首などは、河南省南陽市桐柏県平氏鎮、湖北省恩施市板橋、湖南省桃源県郝坪郷劉坪村、江西省南康県荒塘２号墓など長江中流域の出土例と共通する（図 22）[14]。とくに湖北省恩施市板橋は１枚ずつではあるが、底部の内外面に五銖銭を鋳込んであり、武四郎旧蔵例により近いと言える。河南省南陽市桐柏県平氏鎮、江西省南康県荒塘２号墓の出土例の外面底部にも「大吉」の銘文が陽鋳されている。銭文も吉祥文の一種なので、これらの鍾の一群は底部外面に吉祥の語句や意匠を施す点でも似た傾向をもつと言えよう。

しかし、これらの出土青銅器と比べて、高台の形態だけは大きく異なる。後漢時代の鍾で扁球体状の腹部をもつ型式は図 23 のように高台が高く、中位に稜線がめぐる。さらに、その足縁は高台のほかの器壁より厚く作られ、置いたときの安定が考慮されている。一方、武四郎旧蔵の鍾は高台が極端に短く、稜線もない。また、足縁の厚みは高台のほかの部位と変わらない。

なぜ、武四郎旧蔵の鍾は高台だけこれほど異様なのだろうか。その疑問を解く手がかりは、先述した円筒形の附属容器にある。これが花活けとして転用された経緯を示すからである。

口縁部に左右一対で穿たれた小孔を、20 世紀以降に中国で発掘された出土青銅器にも、清朝以前に中国で伝世した青銅器にも見たことがない。一方、日本の江戸時代に花器として使われた小型銅鐸には身の片面の下部に孔を開けた例が多く存在する。そこに金具を取り付けて、掛花入としたのである［難波 2006］。鍾は本来、壁に掛けるものではなく、酒や水などの容器として据え置くことを想定して作られた。しかし、武四郎の鍾は江戸時代の日本に流入した後、掛花入としても使えるように口縁部に孔を開けたようである。

これと同じかほぼ同じタイミングで、もともと図 23 のように高かった高台も上部で切断されたことが推測される。掛花入として用いたとき、本来の高台の形状では重すぎたのかも知れない。足縁に向かって大きく開く高台本来の形態も、室内の壁に掛けるとき、柱や壁に当たって扱いにくかったのかも知れない。その理由はさておき、江戸時代に出土した銅鐸のうち、全高が 40 センチ程度かそれ以上ある中型の例には、鈕や身を切断して花入に改造したものが少なくとも 9 個体は見つかっている［難波 2006］。武四郎旧蔵の鍾の高台は先述した通り、足縁も厚みが変わらず、高台の下縁面は平坦で、漆か

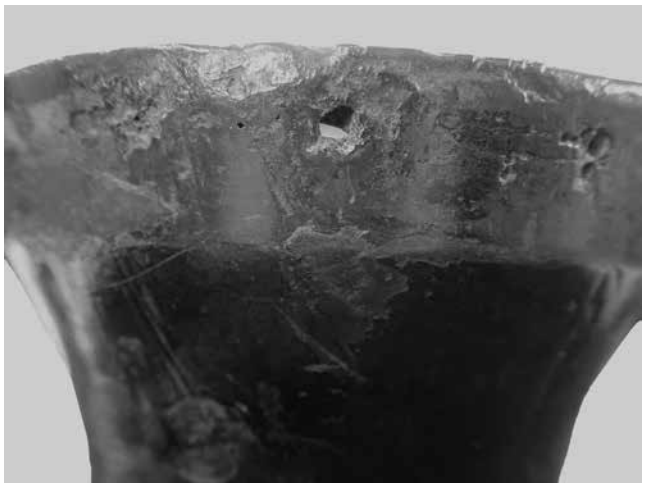


図 22　鍾の口縁部に穿たれた孔

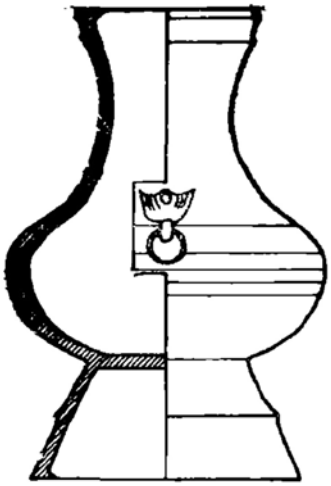


図 23　鍾（江西省南康県荒塘２号墓出土）
（縮尺不明）

蝋の塗布が及んでいない（図 20)。また、明緑色の比較的新しそうな錆が下縁面に分布する。これらの事象は江戸時代の日本で本作の口縁部が穿孔され、高台も切断されたと考えれば、すべて辻褄が合う。明緑色の錆は中国の後漢墓に埋もれていたときではなく、江戸時代以降の日本で切断後に発生した。しかも漆や蝋の塗布が及んでいないため、他の部位では見られない錆の色を呈している。

以上の推測が正しければ、本例は出土後に次のような経過を辿ったことになる。

（1）出土後に泥土や錆を落とし、錆の新たな発生を防ぐためと鑑賞上の嗜好から外面に漆か蝋を塗布した。ただし、高台内面と底部外面には塗布は及んでいない。漆か蝋の塗布が中国で行われたのか、日本で行われたのか、客観的に判断する根拠はない。しかし、塗布の目的に防錆が含まれている以上、古い錆を落とした直後に中国で実施されたと考えるのが合理的である。

（2）江戸時代の日本に輸入。松浦武四郎が入手する以前の所蔵者が、口縁部に穿孔し、高台を切断して掛花入に改造させた。底部の孔の補塡などの修理は（1）（2）どちらの段階でなされたのかは不明である。

1-5．長柄付き鐎斗（図 24、25）

1-5-1．形状

最大高 12.5、最大幅 40.2 センチ。

横断面が円形で浅手の器身に三足と片口がつく。片口を正面に見て、その右側に長くて平たい柄がつく。

器身は平底で、器壁の下半部は垂直をなす。底部と器壁とのあいだは角張らず、丸みを帯びる。器壁下半部の三足がつく箇所は、それぞれ板状に厚く作られている。器壁は中位のやや上よりで外折し、その後すぐに内湾して垂直に立ち上がり口縁部に至る。器身上半部が中国考古でいう盤口をなす。口縁部は玉縁状に作られ、外側に丸く張り出す。玉縁は器身上方につけられた縦断面U字形の片口の上でも途切れることなく、一周する。

三足は中実で細長く、横断面は半円形を呈する。1本は長い柄の下、2本はその反対側に等間隔で配置され、重心が偏らないよう工夫されている。三足は緩やかに外反しながら開くが、末端部が少し内湾する。末端部の外観は馬脚を象っている。

柄は側面から見ると、基部から伸びてすぐに真上に折れ、その直後に再び折れ曲がるクランク状をなし、水平よりやや上向きに伸びる。厚みは基部がもっともあり、水平より少し斜め上に折れて伸びていく部位の下側は厚みが減じていく。その先の厚みはほぼ一定であるが、ごく緩やかに波打つような起伏がある。末端付近は左右に少し張り出し、その中央にタマネギ形の孔が開く。クランク形の折曲部上面には龍と思しき架空動物の顔が陽鋳されている。その側面には龍の歯牙と体毛などが鑿刻される（図 24、26)。柄の下面には 11 文字の銘文があり、「梁山銅，元康二年，白（伯）索史乍（作)」と読める。

全体にスペーサと合范線の痕跡はない。後で触れる轆轤挽きの痕跡もない。柄の基部には、鋳造時に柄から器壁に向かって広がった湯の痕跡が認められる（図 27)。柄は分鋳（後鋳）によって本体に接着したものと考えられる。三足の基部には分鋳の痕跡を明確に視認することはできなかった。

器身の外面底部、三足は随所に小さな欠失によるくぼみがあり、非常に荒れている。柄の下面も基部は荒れているが、その先はくぼみがなく、たいへん円滑である。錆は濃い緑、薄い緑、赤の三色に大別できるが、いずれも膨らみ出た部分は除去済みであり、器表に色を留めるだけである。外面に比べて内面の錆の色のほうが鮮明に見える。また、器身外面と柄は若干の光沢を帯びて暗い色を呈するのに対し、器身内面の色は光沢がなく、より明るい色を発する。器身外面と柄には漆か蝋を塗布した可能性がある。

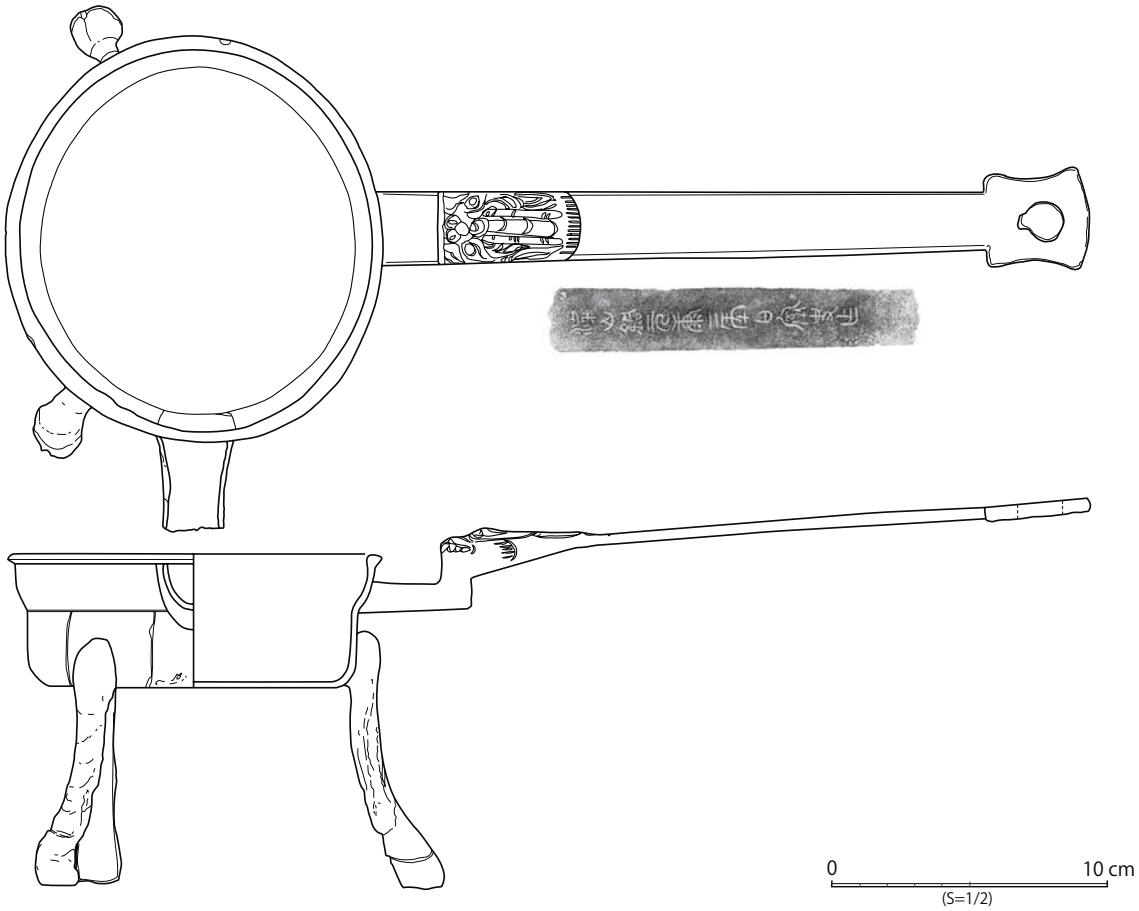


図 24　長柄付き鐇斗（実測図）

図 25　長柄付き鐇斗

図 26　長柄付き鐎斗の柄側面

図 27　長柄付き鐎斗の柄の基部

1-5-2．評価

本例のような形態の青銅器を鐎斗という。その形態の変遷、用途、先行研究については呉小平氏の詳細な論考があるので、ここでは繰り返さない[呉 2008]。ただ、次に述べる鳥頭形の柄や三足のついた青銅器もまた鐎斗の一種と認識されている。そこで、本例のように細長い板状の柄をともなうタイプを、ここでは「長柄付き鐎斗」と呼ぶことにする。

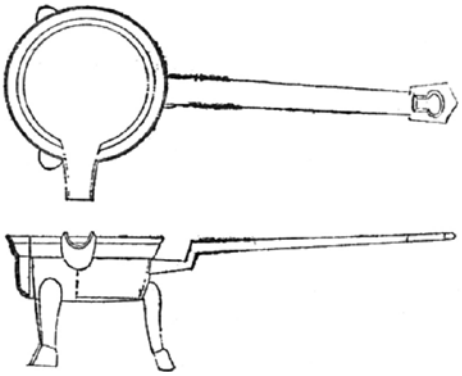


図 28　左才墓出土の長柄付き鐎斗（縮尺不明）

図 29　銘文にある「元」の字

長柄付き鐎斗のうち、本作のように器身が二段からなる盤口を呈し、口縁部が玉縁状のもの。および、三足が相対的に短めで、さほど顕著に外反しないものは、目下、２点の出土例が知られている。隋末の大業４年（608）に没した李静訓墓（陝西省西安市）と、初唐の咸亨４年（673）に没した左才墓（遼寧省朝陽市）にそれぞれ副葬されていた（図 28）[15]。なかでも、玉縁が片口の上にまでめぐる特異な作りは、李静訓墓出土例のそれと共通する。

器身下半部の三足と接する箇所が板状に厚くなる構造は、東魏の大同６年（540）に没した李希宗墓（河北省贊皇県）、韓国ソウル市風納土城の出土例などに類例がある[16]。柄の末端付近に見られる本作の形状は、南朝・斉の貴州省平埧市馬場 37 号墓（５世紀末）の出土例がもっとも近い[17]。柄の上面に龍と思しき動物の顔を半肉彫り状に飾る例は、北魏・太和 10 年（486）頃の墓に副葬された長柄付き鐎斗にも１点だけ見られる[18]。ただし、武四郎旧蔵品の場合、龍頭状装飾が柄のクランク状に屈曲する部位で内側を向いているのに対し、北魏墓出土例は柄の末端寄りで外側を向いている。

以上のように、部分ごとに見れば、５～６世紀の出土例と近い要素をもつ。しかし、器身と三足の形

態は6世紀の南北朝時代以前には見られないものであり、総合的に判断すれば、7世紀の隋から初唐にかけての型式であると言えよう。

問題は柄の下面にある銘文である。

この銘文は一見すると、殷周青銅器に施された陰鋳の銘文のように見える。しかし、陰鋳によって青銅器に銘文を施す技術は、戦国時代には途絶える。代わって、青銅器には細い線刻によって銘文を刻むようになる。武四郎旧蔵の長柄付き鐎斗がもつ銘文は、拡大してよく見ると鏨で刻んだ痕跡がある。例えば、「元」の字の下半部で急激にカーブする部位の輪郭は、美しく自然な曲線に見せようと苦心して何度も打刻した結果、かえって凸凹が顕著になってしまっている（図29）。「伯索史作」と作器者を明示する内容も殷周青銅器の銘文のようである。青銅器銘文の内容は戦国時代から漢時代にかけて、督造させた官吏や工人の名、あるいは設置された宮殿や官署の名を記すことが一般的になる。後漢時代の中期以降は吉祥句が銘文の主体的な内容になる［谷 1999、徐 2007 他］。

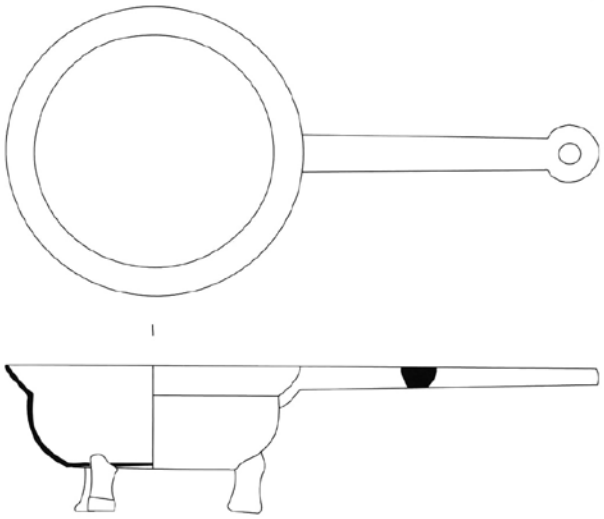


図 30　西晋時代の長柄付き鐎斗（縮尺不明）

銘文中に「元康二年」とある。元康2年は前漢時代の紀元前64年か、西晋時代の292年のいずれかを指す。長柄付き鐎斗は漢時代に出現していない。西晋時代になってから出現する［呉 2008］。西晋時代の確実な例は山東省臨沂市洗硯池1号墓で出土した3世紀末のものが知られているが[19]、その形態は古拙であり、武四郎旧蔵品や7世紀の隋唐期の出土例とは大きく異なる（図30）。

また、11文字の銘文中、冒頭から7文字分の「梁山銅，元康二年」は『博古図録』巻二一・二八に著録されている「漢梁山鋗」の銘文「梁山銅，二斗，鋗，重十斤，元康元年，造扶。」を手本にして刻んでいることは、互いの字形の酷似によって推定できる。さらに、残りの4文字分の「伯索史作」も同じ『博古図録』巻二一・三十、つまり、「漢梁山鋗」の次に掲載されている「周季姜杅」の銘文「伯索史作，季姜寶盂，其萬年子子孫孫永用。」のうち、冒頭の作器者を示した4文字に取材していることが[20]、内容と字形までも共通することから分かる。同じ書籍の同じ巻にたまたま前後連続して載っていた、周、漢と時代の異なる2つの青銅器の銘文を、時代考証も経ず安易に切り貼りした、支離滅裂な内容と言わざるを得ない。恐らくは『博古図録』の刊本が民間に広く流布し、青銅器収集の需要が高まった清時代の偽刻であろう。ただし、『撥雲餘興』首巻に「明治丙子十一月偶得淺艸菊橋之西骨董舗」とあるから、明治9年（1876）、中国の年号では光緒2年がその下限となる。

1-6．鐎斗（図31、32）

1-6-1．形状

最大高12.4、最大幅28.5センチ。

横断面が円形で浅手の器身に三足と片口をもつ。三足は器身の胴下部から内湾しながら垂下し、先端付近で鋭く外側に曲がる。片口を正面に見て、その右側にS字状に湾曲した柄がつく。曲柄の先端は嘴の平たくて長い水鳥の頭を象っている。器身の左側には鋬という板状の突出部がある。真上からみると、鋬は宝珠形を呈する。真横から見ると、口縁部からやや斜めに跳ね上がり、水鳥の尾羽のように見える。

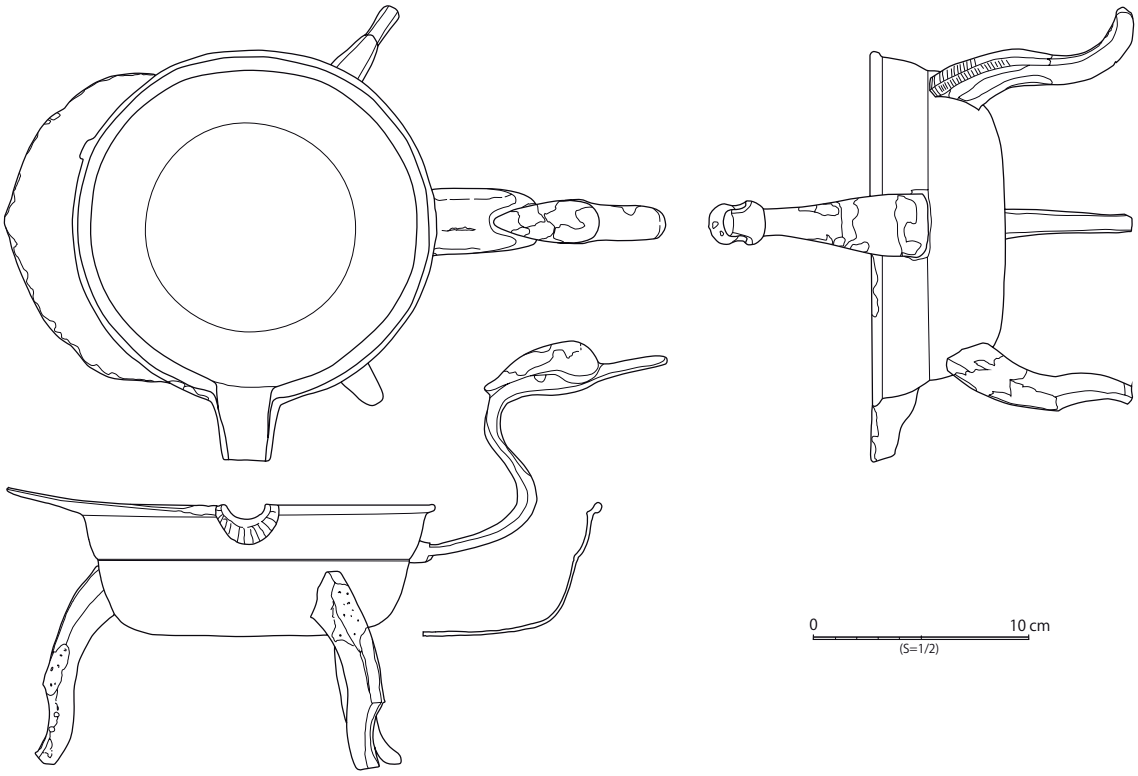


図 31　鐎斗（実測図）

図 32　鐎斗

器身は平底から器壁が内湾しながら立ち上がり、斜め上方に延びる。中位やや上寄りで少し外側に張り出し、段を作る。器壁はそのまま斜め上方に延び、口縁部に至る。口縁部は鍔状に短く外折し、その上部を蒲鉾状の突帯が縁取る。

外面底部は中心からやや外れた位置に、何かを削り取った長い直線状の痕跡が集中する（図 33）。鋳造時に残った湯口のバリを工具で削り取った痕跡と推測される。また、底部全体には同心円状に切削痕が広がる。器壁の外面にも 10 本程度の平行沈線で構成された粗い切削痕と、細かい線状痕が随所に見られる。器身の内部は丁寧に研磨されている。片口と鋬には、後述する三足と曲柄に見られるような後鋳の痕跡がない。器身は内外面ともにスペーサや合范線はない。以上のことから、器身は片口と鋬とあわせて蝋型で成形され、外面底部に設けられた湯口から鋳造したこと。その後、高速回転する轆轤のような機械に固定のうえ、表面に工具の刃を当てて切削し、平滑に整えた製作工程が想定される。轆轤による表面の切削をともなうこの種の青銅器を、日本では佐波理（サハリ）

図 33　鐎斗の外面底部

図 34　三足のうち１本の基部

図 35　鐎斗の三足のうち１本の先端

あるいは響銅と呼ぶ。

曲柄と三足は基部を見ると、器身表面にバリ状に広がった湯を削り取って整えた痕跡がある。この種の痕跡は曲柄と三足のほうにはない（図 34）。曲柄と三足は、完成した器身の表面に接しながら鋳型を組んで鋳造した、いわゆる分鋳（後鋳）で製作されたことが分かる。曲柄と三足も表面に粗い切削痕と細かい線条痕を無数に留める。三足は面取り加工の痕跡が明瞭で、横断面が丸くなく、角ばった多面形を呈する。三足のうち２本は先端部が欠失し、土製の内型が露出している（図 35）。曲柄の基部は補強のため、やや厚く作られている。

内面には除去しきれていない土錆とともに、青や緑の錆が残る。外面にはやや暗い緑色の錆が所々に

ある。外面にのみ漆か蝋を塗布したものと考えられる。ただ、曲柄下面の表層が剥離した箇所に見える錆の緑は比較的明るく、ここには塗布の手が回らなかった可能性がある。

1-6-2．評価

本例のように、三足と柄のついた鍋型の青銅器を鐎斗と呼ぶ[呉 2008]。柄がクランク形に折曲した後でまっすぐ伸びる先述のタイプが西晋時代に出現するのに対し、S字形曲柄タイプはそれよりも早く、漢時代には出現する[呉 2008]。

ただ、その曲柄はもっぱら龍頭を象ったものが主流であり、本作のように水鳥頭部の形をした曲柄をもつ鐎斗の出土例は３点しか知られていない[21]。その年代はいずれも唐時代に絞られる。唐時代のうち７世紀のもの、７世紀末から８世紀初頭にかけて副葬されたもの、大中２年（848）に副葬されたものがそれぞれ１点ずつある。最後の９世紀の例は、しばらく伝世した後に副葬されたのかも知れない。

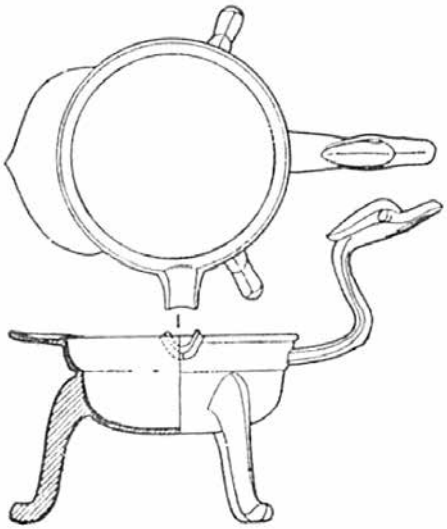


図 36　河南省偃師市杏園村 2603 号墓出土の鐎斗（縮尺不明）

武四郎旧蔵品と器形が細部に至るまでもっとも近い例は、７世紀末から８世紀初頭にかけて副葬された河南省偃師市杏園村 2603 号墓の出土品である（図 36）。武四郎旧蔵の鐎斗の年代を推定する大きな手掛かりとなる。

本作が佐波理と呼ばれる青銅器の一群であることは先に指摘した。佐波理は中国では南北朝時代の５世紀に本格的に始まり、唐時代も継続する。製作技法から見ても、武四郎旧蔵鐎斗の年代を７世紀末から８世紀初頭と見なすことは妥当である。

繰り返しになるが、錆を落として漆か蝋を外面のほぼ全体に塗布している。この点を除けば、明らかに後世の人為による補修や改造の痕跡は、視認されなかった。

1-7．兕觥蓋（図 37、38）

1-7-1．形状

最大高 10.5、最大幅 25.3 センチ。

平面形が縦に長い隅丸の台形を呈する器蓋の一種である。側面形はＳ字を倒置したように波打つ。より高く突出する方が前で、前面には一対の柱状の角をもつ獣面文が飾られる。後部中央には尾が突出するが、後面にあしらわれた別の獣面文が突き出した舌にもなっている。両獣面文のあいだは中央を脊稜が縦断する。脊稜の左右両側にはＳ字形に抽象化された変形龍文が飾られ、その地を雷文が埋める。下面には板状の突帯が縁辺より内側をめぐる。器身に被せたときに、蓋の脱落やずれを防ぐ機能があるが、器身は欠失したのか現在は伴っていない。蓋裏に８文字の銘文があり、「南或（國）東或（國），命西六師」と記す。

スペーサと合范線はなく、全体を失蝋法によって鋳造している。表面全体は漆か蝋を塗布し、鈍い光沢のある暗灰色を呈する。緑や赤く見える箇所も散在する。

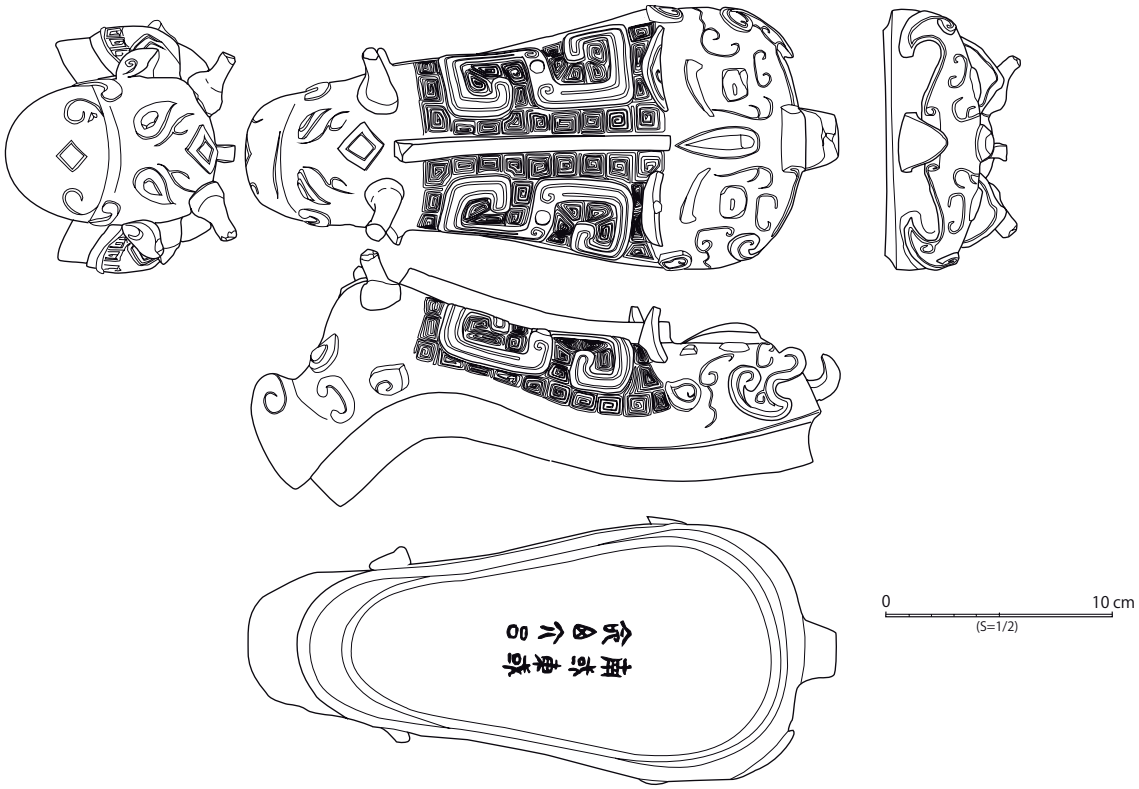


図 37　兕觥蓋（実測図）

1-7-2．評価

殷周青銅器の兕觥の蓋を模した倣古作である。形態、製作技法、銘文ともに殷周青銅器のそれと大きく異なる。

図 38　兕觥蓋

殷周青銅器の兕觥蓋のなかにも、獣面文、脊稜、雷文などをもつ例は多く存在する。しかし、本作の文様表現はまったく稚拙であり、実物の兕觥蓋を見る機会のない者が伝聞や想像を交えて作り出した極めてお粗末な代物である。S字形の変形龍文は春秋時代の青銅器に見られる、林巳奈夫の「並列S字形羽渦文」に近い印象を与える［林1989］。

失蝋法による鋳造と先に指摘したが、殷周青銅器は基本的に真土型を用いた鋳造により製作されている。本作上面の文様や装飾で突出した箇所、たとえば獣面文の耳目、鼻梁などはすべて個別のパーツを蜜蝋で製作し、やはり蜜蝋で作り上げた器蓋本体の原型の上面に貼りつけている。突出部の周縁に浅く削りこんだ溝状の痕跡がめぐるのは、突出部のパーツを個別に貼りつけた後で、はみ出した余計な部分を削り取り、形を整えたためである。文様の凹線は雷文を除いて鋳造後に工具で刻みこんだものである。雷文は本来、凸線の稜がシャープに鋳出されるものであるが、本作の雷文は蜜蝋の原型に型押しをして施したのか、凸線の稜がどれも不鮮明で甘い（図 39）。

蓋裏の銘文の周囲には、蜜蝋の突帯を縦長五角形に蓋の蝋型に貼りつけて区画し、さらにそのなかに蜜蝋を盛って肉厚に作ろうとした痕跡がある（図 40）。もっとも、その大半は鋳造時に剥がれてしまっ

図 39　兕觥蓋の雷文

図 40　兕觥蓋の蓋裏銘文

たのか、目論見通り肉厚に鋳造できた範囲は限られている。銘文はこの縦長五角形の区画内へ鋳造後に刻んでいる。鏨の痕跡を覆い隠すためか、銘文のなかには恐らく擬態の泥土を充填している[王 1987]。しかし、各字の輪郭を拡大して観察すると、とくに「命」字の湾曲している部分などは、鏨を連続打刻したためにギザギザになった痕跡が顕著である。筆線の先端や末端が随所で鋭く尖るのは後刻の銘文によくある傾向のひとつで、本作の「東」字などにも見受けられる。

銘文「南或（國）東或（國），命西六師」は、西周後期の周穆公鼎（禹鼎、成鼎）がもつ 156 文字の長い銘文から適当に抜粋したようである。周穆公鼎は『博古図録』巻二・二四に臨模された銘文とともに載っている。字形もこれにある程度倣った可能性がある。

表面に所々見られる緑や赤の箇所は錆の擬態であり、漆か蝋を塗布する前に顔料で着色したものと推定される。

本作のように造形や文様表現の稚拙な殷周青銅器の倣古作は、『西清古鑑』にも多く見られる。清時代の乾隆年間以前に作られたものと推定される。

２．松浦武四郎が旧蔵した中国青銅器コレクションの意義

以上に見てきた７件のほかに、静嘉堂文庫美術館に現存する３件、および『撥雲餘興』首巻・二集、『蔵品目録』に掲載されたものを加えると、松浦武四郎旧蔵の中国青銅器は少なくとも 15 件あったことが知られる。それらを器種、型式から見た時代、武四郎入手に至るまでの経緯の項目ごとに一覧化したものが表１である。なお、武四郎入手に至るまでの経緯は基本的に『撥雲餘興』の記載に基づいている。

15 件ある中国青銅器の型式から比定される時代の内訳は殷時代が２件[22]、西周～春秋時代が４件、戦国・新時代が１件、漢時代が５件、隋～唐時代が２件、清時代が１件である[23]。漢時代以降のものが約半分を占める一方で、西周時代の可能性をもつものが鳥形装飾部材の１点しかない。また、15 件のうち銘文を確実にもつものは、偽刻の２件を含めて３件しかない。

銘文、とくに数十字以上の長い銘文をもつ青銅器は西周時代の中期から後期にかけてもっとも集中する。中国における青銅器の研究は、北宋の滅亡とともに宮廷コレクションが失われると、実物がなくても臨模や拓本があれば研究可能な銘文を対象とした金文学が発達した。清時代の乾隆年間になって『西清古鑑』が著されると、『博古図録』以来約 600 年ぶりに、銘文の他に器形の絵図をともなう体裁の本

表１　松浦武四郎旧蔵の中国青銅器一覧

假番号	名称	型式から見た時代	武四郎入手に至るまでの経緯	現所在地	備考
1	鼎	殷時代後期・紀元前13～前11世紀	明治12年（1879）、「西遊中」に入手。	不明	
2	爵	殷時代後期・紀元前13～前11世紀	明治７年（1874）春に鉄瓜子より入手。	明治９年（1876）10月、火災により焼失。	「父葵（ママ）爵」と命名していることから、「父癸」銘をもっていた可能性がある。
3	鳥形装飾部材	西周～春秋時代・紀元前10～前８世紀	不詳。『撥雲餘興』二集刊行の明治15年（1882）以前に入手。	静嘉堂文庫美術館	用途不明。青銅器の装飾パーツ断片であると推定される。
4	戈	春秋～戦国時代・前５～前４世紀	不明。	静嘉堂文庫美術館	『静嘉堂蔵　松浦武四郎コレクション』の解説に『蔵品目録』に「戈　一振」と記される、とある。
5	鉏	春秋時代前～中期・紀元前７～前５世紀	明治11年（1878）以前に入手。	静嘉堂文庫美術館	後世の改造・補修が少なくとも一部に行われている可能性。
6	盞	春秋時代中～後期・紀元前７～５世紀	明治９年（1876）10月、楓川子より得る。	静嘉堂文庫美術館	後世の改造・補修が少なくとも一部に行われている可能性。
7	銅貨一式（布銭、刀銭、貨布など）	戦国時代、新・紀元前５～前３世紀、紀元前１世紀末～紀元後１世紀初頭	明治９年12月以前に「服部（波山か）氏、狩谷（棭齋か）氏、平岡（琢か）氏伝来」	不明	
8	扁壺	前漢時代・紀元前２～前１世紀	明治９年（1876）５月以前に入手。	不明	
9	漢古印３顆	後漢時代・１～３世紀	明治14年（1881）、永井喜暉の識あり。	不明	
10	勺	前漢時代中期～後期・紀元前２～１世紀	狩谷棭斎（1775～1835）、藤瀬綺石（生没年不詳）旧蔵。明治８年（1875）、鐎斗とともに楓川亭主を介して藤瀬氏より入手。	静嘉堂文庫美術館	実際は棭斎旧蔵の勺とは別個体（川見典久氏ご教示。後に著者も確認）
11	方格規矩鏡	新・紀元前１～後１世紀	伊丹の紙屋与作家伝来。大村成富、福田竹庵（1774～1819）旧蔵。市河寛齋（1749～1820）、大窪詩仏（1767～1837）、梁川星巌（1789～1858）等の識あり。明治２年（1869）、横山町の玉巌堂より購入。	静嘉堂文庫美術館	経緯は杉本論文（2010）126-134頁に詳しい。日本出土品の可能性もあり。
12	鍾	後漢時代中期～後期・２～３世紀	明治11年（1878）以前に入手。	静嘉堂文庫美術館	江戸時代の日本で掛花入に改造されている可能性。
13	長柄付き鐎斗	隋末～唐時代初頭	明治９年（1876）11月、「浅草菊橋之西骨董舗」にて入手。	静嘉堂文庫美術館	銘文は清時代の偽刻である可能性。
14	鐎斗	唐時代・７世紀末～８世紀初頭	勺とともに楓川亭主を介して藤瀬氏より入手。	静嘉堂文庫美術館	
15	兕觥蓋	清時代・17～18世紀	明治４年（1871）10月、「本所石原街骨董舗」にて入手。	静嘉堂文庫美術館	倣古作。

格的な青銅器図録が再登場することとなった。しかし、中国ではその後も銘文の臨模や拓本だけを載せ、器形を載せない法帖が刊行されつづけた。

本稿の冒頭で指摘した通り、日本では辛亥革命を契機に1900年頃から約数十年間にわたって本格的な中国青銅器コレクションが形成されるが、長銘をもつ西周時代中、後期の作例が中国に比べて乏しい[(24)]。この傾向は松浦武四郎の中国青銅器コレクションにも見て取れる。武四郎旧蔵の青銅器銘文のうち２件は、当時の日本ではまだ偽刻と認識されなかったうえ、いずれも短くて無内容のものだった。しかも『撥雲餘興』に掲載された銘文の釈文には誤りが少なくない[(25)]。当時の日本において漢学に造詣が深かった多くの好古家たちにとっても、中国青銅器の銘文は難解で取りつきにくいものだったことが想像されよう[(26)]。

江戸時代の好古家は釈読を試みており、銘文に関心がなかった訳ではない。しかし、少なくともそれ

以上には青銅器の錆を含む古色や器形のほうに関心があった。『撥雲餘興』所載の跋文にも、青銅器の古色を愛でる語句が散見される[27]。漆や蝋を表面に塗って人工的に作り出した青銅器表面の暗い光沢や、付け錆の擬態さえも、当時は時代を考証する手がかりと考えられたうえ、鑑賞すべき見所のひとつでもあった。青銅器の器形は『博古図録』や『西清古鑑』などの図と比較して年代や器種などを考証する、より重要な手がかりであった。これらの図録に多少なりとも器形の近い青銅器があれば、『撥雲餘興』では逐一触れている。江戸時代には、鍾の箇所で指摘したように、青銅器に穿孔や切断など大胆な改造を加えて花活けに転用する事例があったが、やがてこうした無暗な改造は行われなくなった。花月社や兎園会など古器物展翫を目的とする考証サロンが隆盛した江戸後期には［揖斐 2009、136-152 頁］、中国青銅器も風雅な空間を演出するための「漠然とした古物」であること以上に、時代や器種などの考証が可能で好古家同士の品評にもかなう「具体的な古器物」であることがより要求されるようになった。改造が歓迎されなくなった所以である。

考証サロンが衰滅した明治時代、中国青銅器は書画とともに当時流行した煎茶の席を設える道具として重要な役割をもつようになった［長谷川 1965、143-146 頁］。20 世紀の日本における先駆的な中国青銅器コレクターの住友春翠もまた、もともと煎茶趣味を嗜んだ。明治 35 年（1902）には十八会という関西の数寄者 18 人による茶会に参加して、新しく収集した青銅器の数々を披露した［泉屋博古館 2015］。明治 36 年（1903）には帝室博物館（現在の東京国立博物館）で開かれた「古銅器展覧会」にも、18 点を出品している。この展覧会では全体の古代青銅器 39 点のうち、約半分を春翠の所蔵品が占めたことになる。本展の図録『帝室博物館鑑賞録　古銅器』（1906 年刊）には、末尾に「花入れ」「香炉」など茶席に用いられた銅器も別録として 7 点掲載されている。この図録は当時すでに春翠の青銅器コレクションが抜群の質と量を誇っていたこと、および青銅器が茶席からなお分離し切れていなかったことを示しており注目される。しかし、20 世紀になって中国から続々と渡ってきた古代青銅器は大型品も増え、必ずしも煎茶席の床飾りなどに向くものばかりではなかった。むしろ、春翠が入手した虎食人卣の奇特な造形や夔神鼓の圧倒的な存在感は、煎茶席の清雅な空間に拠らなくとも観る者を十分に驚かせ、楽しませることができた。古代青銅器コレクションが充実していくに従って、青銅器の鑑賞そのものが煎茶から自立していくのは自然の成り行きであったと言える。この流れは 1920 年頃から顕著になる煎茶の衰退と、それに取って代わった抹茶の再興によって、さらに決定的なものとなった。大正 7 年（1918）に出版された、春翠の青銅器コレクションを掲載した図録『泉屋清賞』には、煎茶席に関する内容はまったく見られない。そればかりか、コロタイプによって器体の写真が鮮明に印刷され、京都帝国大学考古学研究室の初代教授・浜田耕作（1881～1938）と、後に東京帝国大学文学部考古学講座の初代教授となる原田淑人（1885～1974）が解説を執筆している。煎茶から自立した春翠の青銅器コレクションは、図録のなかで近代の科学と結びつくことによって、鑑賞品であると同時に考古学資料にもなったのである。

こうして 20 世紀に中国青銅器を包摂しようとした日本の考古学のなかには、銘文を対象にした中国の伝統的な金文学は殆ど受容されなかった。近代日本で清朝金文学とその担い手である文人たちに接近していったのは、考古学者ではなく、内藤湖南のような東洋史学者か、中村不折、高島槐安といった書画の愛蔵家たちであった［台東区立書道博物館 2021 他］。日本における中国青銅器収集の動機は、江戸後期の好古家による古器物展翫、明治期における数奇者たちの煎茶趣味を経て、近代の考古学者による科学的研究、および博物館での展示へとシフトしたが、銘文よりも器形を重要視する傾向は変わらなかった。日本の考古学者は、時代・器種・用途などをおもに器形の観察と比較によって明らかにし、コレクターや博物館の多くは殷墟、洛陽金村、楽浪の出土品など従来知られて来なかった新奇な器形の青銅器を歓迎した。

松浦武四郎旧蔵の中国青銅器は、好古家の古器物展翫が下火となり、参加者自らの考証や詩作を伴うことなく、茶席での鑑賞を専らとする煎茶趣味のなかで中国青銅器が扱われるようになる移行期に収集された。『撥雲餘興』所載の古器物とそれらをめぐる思考と賞賛の記録は、江戸後期以来の考証サロン的な活動が落日前に放つ最後の強烈な光芒であったと言えよう。そこに読み取れる器形の観察を重要視した姿勢は、今日までつづく考古学としての中国青銅器研究の傾向にも一脈通じる。一方、錆などの表面様態で製作時期を判断する考え方はその後の考古学には受け継がれなかった。錆が製作時期を判定する客観的な根拠たり得ないのは確かであるが、青銅器表面に施される漆か蝋の塗布や付け錆、さらには器形の改変といった出土後の加工に対して、近代以降の多くの考古学者は無関心であり、時に無垢でさえあった。史料批判的な手続きを経ないまま、後世に手の加えられた青銅器が研究の俎上に載ることの弊は言を俟たない。武四郎旧蔵の中国青銅器と『撥雲餘興』は、その後の日本における中国青銅器の収集と研究で顕著になる器形重視の傾向を萌すとともに、銹などの表面様態に対して無関心でありつづける考古学の研究姿勢の是非をはからずも問うている。

謝辞

松浦武四郎旧蔵青銅器の調査では山田正樹氏をはじめとする静嘉堂文庫美術館の皆様、および内川隆志氏（國學院大學研究開発機構教授）にご支援をいただきました。記して感謝申し上げます。

註

（1） 静嘉堂文庫美術館に現存する 10 点のほかにも、『撥雲餘興』首巻・二集、および松浦武四郎の生家に伝わった『蔵品目録』（松浦武四郎記念館蔵、成立年代不明）には殷時代の鼎・爵、春秋戦国時代の銅貨各種 16 点、漢時代の扁壺・印章などの中国青銅器が著録されている。

（2） 戈・鳥形装飾部材（鳥形太刀頭）・方格規矩鏡の３点については、未見のため本稿ではとくに触れない。

（3） 本作品は『撥雲餘興』二集に秦蔵六の絵図入りで載っている。この絵図には、上下方向の綯文が桃の実状のくぼみをもつ面だけでなく、把手のある面にも描かれている。この表面に縦方向の綯文がもともとあって、剥離したような痕跡は認められない。秦蔵六が把手のある面にも縦方向の綯文を描いたのは、恐らく誤認によるものだろう。

（4） 洛陽博物館 1981、武漢市文物商店 1983 を参照。

（5） 本稿は中国考古学界の通例にならい、春秋時代と戦国時代との境界を紀元前 453 年に置く。

（6） 蔡太史鉶は未見ながら、ネット上の画像に写った器壁内面の形状から桃の実状にくぼんでいることを知ることができた。http://sllii.com/read/1416343810/

（7） 釈文は中国社会科学院考古研究所 2007（10356）による。

（8） 中野 2003 他を参照。

（9） 2013 年に静嘉堂文庫美術館で特別展「静嘉堂　松浦武四郎コレクション」が開幕する直前に、同コレクションの中国青銅器の製作年代について関係者から意見を求められたことがあった。私の考えは本文に記した通りで、中国古代に製作されたものであれ清時代の倣古であれ、漆や蝋が厚く塗布された個体は目視だけによる判別が難しい、というものだった。ただ、限られた時間のなかで真意をうまく伝えることがかなわなかった。結果、図録にも会場キャプションにもこれら青銅器の製作年代は「清」と表記されることになった。しかし、鉶や後に述べる盞、鍾、長柄付き鐎斗は、オリジナルの器体に後世の補修や加工を施したものと認識している（ＣＴスキャンなどを用いた科学的な調査が行われない限り、主観の域を出るものではなく、清時代の倣古である可能性がまったくゼロになる訳ではないが）。この場を借りて、展覧会関係者に誤解を与えてしまった拙劣な伝え方をお詫びするとともに、私の真意を改めて明記させていただく。

（10） 呉 2012 所載の 06053・06056・06059・06075、ならびに呉 2016 所載の 0522・0523・0524・0526 を参照。

（11） 中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理処 1980、揚州市博物館 1980 を参照。

（12） 内面底部にも五銖銭の鋳込みがあるかどうかは確認していない。

（13） 孫 2011、366-367 頁。林 1976、247-248 頁を参照。

(14)　李 2018、516、王 1990、桃源県文化館 1986、贛州地区博物館・南康県博物館 1996 を参照。
(15)　中国社会科学院考古研究所 1980、遼寧省博物館文物隊 1982 を参照。
(16)　石家荘地区革委会文化局文物発掘組 1977 を参照。風納土城出土品は韓国中央国立博物館にて実見。
(17)　貴州省博物館考古組 1973 を参照。
(18)　寧夏固原博物館 1988 を参照。
(19)　山東省文物考古研究所・臨沂市文化広電新聞出版局 2016 を参照。
(20)　『博古図録』巻二一・二九は、同・二八「漢梁山銅」に関する記述で占められる。そのため、同・三〇の「周季姜杅」が同・二八「漢梁山銅」の次の著録された青銅器に当たる。
(21)　中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊 1986、鎮江市博物館 1985、武漢市文物考古研究所・武漢市江夏区博物館 2003 を参照。
(22)　『撥雲餘興』では「漢時代」と認識。
(23)　兕觥蓋の倣古作が該当。『撥雲餘興』では『博古図録』所載の「周夔匜」に近似していると記す。
(24)　日本における例外は中村不折の青銅器コレクションである。不折は青銅器の器形だけでなく銘文も重要視してコレクションを充実させていった。
(25)　たとえば『撥雲餘興』では長柄付き鐎斗の偽刻銘文を「梁山銅，元康二年，口宰吏作」と釈読するが、正しくは「梁山銅，元康二年，伯索史作」である。また、兕觥蓋の偽刻銘文を「南國東國，命其六官」と釈読するが、正しくは「南國東國，命西六師」である。
(26)　江戸時代の漢学者や好古家たちにとって「目の前にある器物が何に用いるもので、いつの時代のものなのかを知る拠りどころとなったのは、『博古図録』や『西清古鑑』といった図譜であり、また宋代以降、文人の嗜みとして記された随筆類であった」ことは川見論文（2020）に詳しい。江戸時代の彼らの「拠りどころ」のなかに、清朝後期の中国の文人が青銅器収集と研究の規範にした『集古斎鐘鼎彝器款識』のような金文資料の法帖が含まれていないことは注目してよい。
(27)　一例を挙げると、『撥雲餘興』の「漢饕餮紋鼎」に松浦武四郎が寄せた跋のなかに次のようなくだりがある。「銅色土花水銀翠碧相間映日照之真如古錦」。

図版出典

図 1、7、16、18、24、31、37　内川隆志氏提供
図 2、8、17、19、25、32、38　静嘉堂文庫美術館提供
図 3、5、6、9～12、15、20～22、26、27、29、33～35、39、40　筆者撮影
図 4　武漢市博物館 2006、43 頁
図 13　河南博物院・台北国立歴史博物館 2001、126 頁
図 14　河南省文物考古研究所 2007、図八八
図 23　贛州地区博物館・南康県博物館 1996、図九 -10
図 28　遼寧省博物館文物隊 1982、図六 -1
図 30　山東省文物考古研究所・臨沂市文化広電新聞出版局 2016、図一七三 -2
図 36　中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊 1986、図二四 -9

参考文献

揖斐高『江戸の文人サロン　知識人と芸術家たち』吉川弘文館、2009 年
王栄達「従修復角度談商周青銅器的真偽鑑定問題」『考古与文物』1987 年第 2 期、102-107 頁
王暁寧「湖北鄂西自治州博物館蔵青銅器」『文物』1990 年第 3 期、42-51 頁
河南博物院・台北国立歴史博物館『新鄭　鄭公大墓青銅器』大象出版社、2001 年
河南省文物考古研究所『鄭韓故城興弘花園与熱電廠墓地』文物出版社、2007 年
川見典久「江戸時代の文人が見た中国古銅器」『黒川古文化研究所紀要　古文化研究』第 19 号、2020 年、53-107 頁
贛州地区博物館・南康県博物館「江西南康県荒塘東漢墓」『考古』1996 年第 9 期、37-45 頁
貴州省博物館考古組「貴州平埧馬場東晋南朝墓発掘簡報」『考古』1973 年第 6 期、345-355 頁

呉小平「銅鐎斗的器形演変及用途考」『考古』2008 年第 3 期、62-72 頁
呉鎮烽編『商周青銅器銘文暨図像集成』上海古籍出版社、2012 年
呉鎮烽編『商周青銅器銘文暨図像集成続編』上海古籍出版社、2016 年
山東省文物考古研究所・臨沂市文化広電新聞出版局『臨沂洗硯池晋墓』文物出版社、2016 年
朱鳳瀚『中国青銅器綜論』上海古籍出版社、2009 年
徐正考『漢代銅器銘文綜合研究』作家出版社、2007 年
杉本欣也「江戸時代における古美術コレクションの一様相－古鏡の収集と出土情報の伝達－」『黒川古文化研究所紀要 古文化研究』第 15 号、2016 年、91-192 頁
静嘉堂『静嘉堂蔵　松浦武四郎コレクション』2013 年
石家荘地区革委会文化局文物発掘組「河北贊皇東魏李希宗墓」『考古』1977 年第 6 期、382-390・372 頁
泉屋博古館『住友春翠』1995 年
孫機『漢代物質文化資料図説（増訂版）』2011 年、上海古籍出版社
台東区立書道博物館『清朝書画コレクションの諸相　－中村不折・高島槐安収集品を中心に－』公益財団法人　台東区芸術文化財団、2021 年
谷豊信「漢代紀年銘遺物に関する一考察－金属製品の検討－」同論集編集委員会『論集　中国古代の文字と文化』汲古書院、265-288 頁
田畑潤「煎茶－中国古銅器と日本・中国の文人文化－」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』21、2016 年 3 月、50-62 頁
中国社会科学院考古研究所『唐長安城郊隋唐墓』文物出版社、1980 年
中国社会科学院考古研究所『殷周金文修成　修訂増補本』中華書局、2007 年
中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理処『満城漢墓発掘報告』文物出版社、1980 年
中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊「河南偃師杏園村的六座紀年唐墓」『考古』1986 年第 5 期、429-457 頁
鎮江市博物館「江蘇鎮江唐墓」『考古』1985 年第 2 期、131-148 頁
桃源県文化館「桃源県発現漢代銅器和晋代印章」『湖南考古輯刊』第三集、湖南省博物館・湖南省考古学会、岳麓書社出版、1986 年、276-277 頁
冨田昇『流転　清朝秘宝』日本放送出版協会、2002 年
中野徹「擬古・倣古」古田真一・山名伸生・木島史雄編『中国の美術　見かた・考えかた』昭和堂、2003 年、178-181 頁
難波洋三「花入などに転用された銅鐸」『京都国立博物館だより』１・２・３月号、2006 年 1 月 1 日発行
寧夏固原博物館『固原北魏墓漆棺画』寧夏人民出版社、1988 年
長谷川瀟々居『煎茶志』平凡社、1965 年
林巳奈夫『漢代の文物』1976 年、京都大学人文科学研究所
林巳奈夫『春秋戦国時代青銅器の研究　殷周青銅器綜覧三』吉川弘文館、1989 年
廣川守「商後期から西周期における大型把手の接続方法」泉屋博古館・九州国立博物館『三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究』2015 年、454-460 頁
武漢市博物館『８＋１武漢城市圏文物精品図録』2006 年
武漢市文物考古研究所・武漢市江夏区博物館「武漢江夏流芳唐墓清理発掘簡報」『江漢考古』2003 年第 4 期、14-17 頁
武漢市文物商店「武漢市収集的幾件重要的東周青銅器」『江漢考古』1983 年第 2 期、36-37 頁
松浦武四郎『撥雲餘興』1878 年
松浦武四郎『撥雲餘興　二集』1883 年
揚州市博物館「揚州西漢“妾莫書”木槨墓」『文物』1980 年第 12 期、1-6 頁
洛陽博物館「洛陽哀成叔墓清理簡報」『文物』1981 年第 7 期、65-67 頁
李伯謙『中国出土青銅器全集　10　河南　下』科学出版社・龍門書局、2018 年
遼寧省博物館文物隊「遼寧朝陽唐左才墓」『文物資料叢刊』６、文物出版社、1982 年、102-109 頁

國學院大學博物館蔵「六鈴鏡」
―根岸武香遺愛の鈴鏡について―

新井　　端

１．はじめに

北武蔵の考古家として著名な根岸武香は、現在は国重要文化財に指定されている『短甲武人埴輪（埼玉県熊谷市上中条出土)』をはじめとする多数の考古資料や古銭、古文書などの資料を多面的に蒐集しており自邸に資料展示室まで設けていた。根岸の蒐集品の大要は国会図書館に寄贈された「胄山文庫」が文献資料の中心で、考古資料は『東京人類学会雑誌』第 207 号への紹介内容から、その概要を知ることができる。だがその紹介資料が全てではないとされており、根岸の没後に流出した資料、遺されている資料を再検討しなければ根岸コレクションの意図した内容を知ることができない。遺されたままの出土地不明資料も来歴が明らかになれば、骨董的扱い越えて考古資料としての研究価値がみえてくるだろう。

根岸は蒐集資料の多くを様々の出版物や展示会などでの公開活用を許容していたことから、後に流出した資料の捜索はある程度可能と考えていたが、実際にそのような機会に巡り合うことは無く、今回紹介する「六鈴獣形鏡」はその幸運な例となった。現在、國學院大學博物館に収蔵されている服部和彦氏寄贈の「六鈴獣形鏡」は、出土地などの来歴が不詳となっているが、根岸武香の旧蔵品であると考察したものである。

２．六鈴獣形鏡について

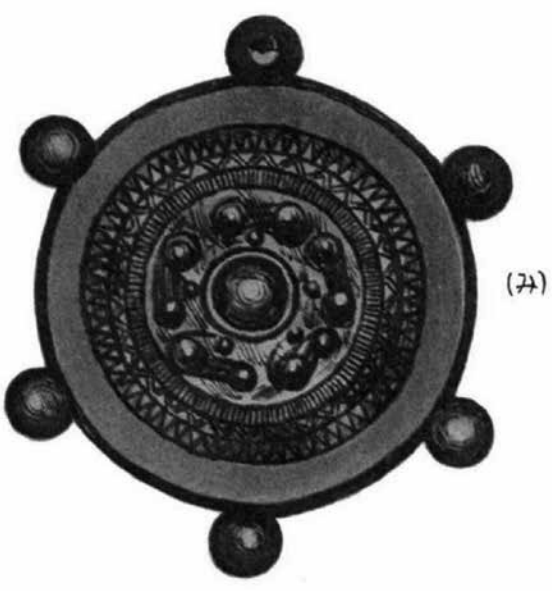
根岸武香が所蔵していた六鈴鏡については、①柴田常恵(1905)、②富岡謙蔵(1920)、③考古学会(1920)、④後藤守一（1926)、⑤森本六爾（1928）氏等の報告から整理することができる。諸氏の研究報告の中で、②、③、④においては写真と拓本が掲載されている（第１図)。

①柴田常恵は、根岸武香の没後に記念号として刊行された『東京人類学会雑誌』の「図版考説」において根岸武香所蔵資料の紹介を担当しており、柴田はこの六鈴獣形鏡について次のように記している。「(み）鈴鏡　　六鈴の漢鏡にして、２分の１の大きさに写せり、此物に就きての説明は君の記す所に依れば、【「この鈴鏡は武蔵国比企郡大岡村大字大谷字庚塚（里俗曰加禰都加）より、文化年中石川長勝の父長右衛門が掘得たるなり、当時玉剣なども共に出現したるよしなるが、そはいつれかへちりうせて此のかゝみのみ家の神棚に納めありしを、明治五年三月長勝より送られたるなり。」以て其出所を知り得べし。】と説明があり、彩色図が掲載されている（第１図２)。来歴が簡潔に記されており、出土地は古墳だったと考えてよいだろう。

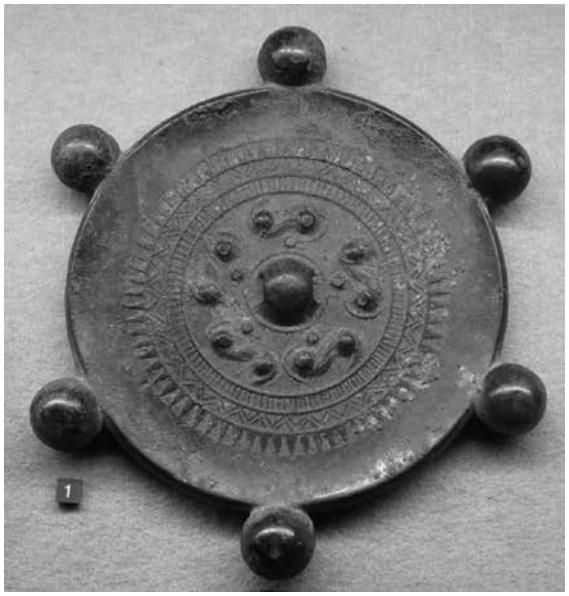
②富岡謙蔵「鈴鏡に就いて」『民族と歴史』に六鈴鏡の類例として【武蔵国比企郡大岡村大谷大字唐塚出土（故根岸武香氏蔵)】とあるが未定稿のため拓図や詳細の説明はない。唐塚は庚塚の誤植と思われる。

③考古学会『十二考古家資料写真帖。第２回』考古家を紹介した図書で肖像と短冊、遺愛の品として六鈴鏡と古文書の写真を掲載している。コロタイプ図版は鮮明で文様と銹の詳細がよく観察される。この写真と現状の写真を比較することで、両者は同一品として確認できる。第２図は本書の写真と現在の写真を比較したもので、文様は全く一致し、Ａ～Ｄの４か所の銹の位置と形状は同一であることがわかる。写真の説明は【二五　根岸武香遺品鈴鏡　計四寸六分　　根岸半七氏蔵】である。

1．（考古学会 1920）



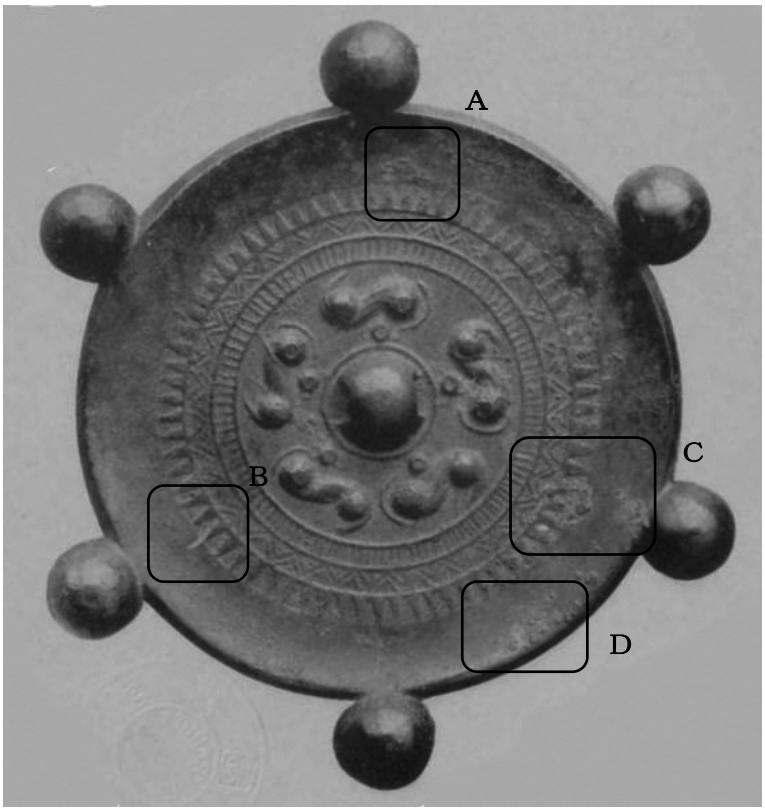
2．（柴田常恵 1905）

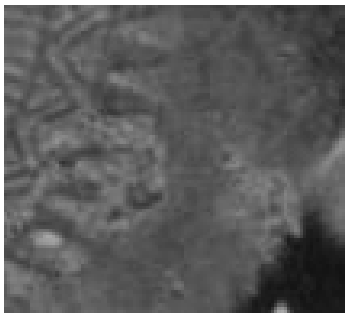


3．國學院大學博物館蔵

4．（後藤守一 1924）

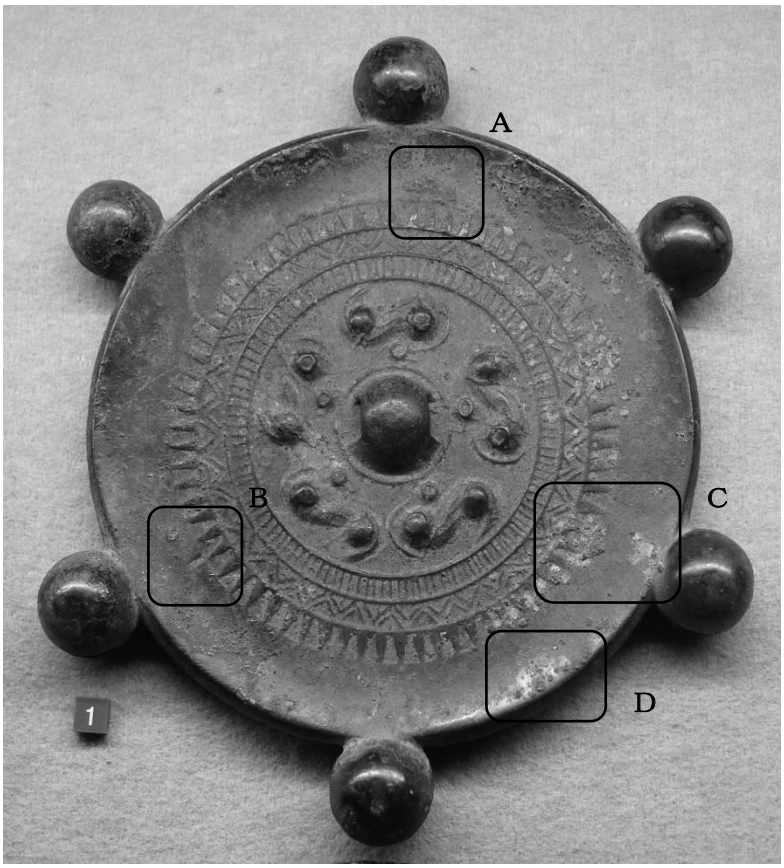
第１図　各書に掲載された六鈴獣形鏡（１.２.４）と國學院大學博物館蔵鏡（３.）





Ｃ部分拡大

1920 年文献　掲載写真　　一致する銹の位置と形　　Ｂ部分の拡大



Ｃ部分拡大

2020 年撮影　現況　　Ｂ部分拡大

第２図　特徴の比較

④後藤守一『漢式鏡』　六鈴鏡の拓本を掲載し説明を付している。【第三百五十八図　鈴鏡　武蔵国比企郡大岡村大字大谷　根岸武香氏遺品・・・　武蔵国大谷発掘の六鈴鏡は五獣である。】なお、本書には拓影図が掲載されている（第１図４）。

⑤森本六爾「鈴鏡に就いて」『考古学研究』の中で資料一覧表に掲載している。

【二八　同国比企郡大岡村大谷庚塚　（六鈴鏡）】

前記①～⑤に取り上げた文献の六鈴鏡は出土地または根岸旧蔵品と明示されていることから、國學院大學博物館収蔵の六鈴鏡と比較が可能となり、文様・鏡式とも一致する同一鏡と判断したものである。改めて特徴を説明する。

〔法量〕　・面形 10.9㎝　・重量 189 g

〔形状〕　全体がよく残り背面の文様も明瞭。にぶい黒緑色の薄銹に覆われ、一部に緑色の薄銹が生じる。この銹の位置が古写真にも同位置に観察される（第２図Ａ、Ｃ、Ｄ）ことから同一鏡と判断している。

〔文様・形態〕　鈕は半球形に近く鈕穴は鏡背面に接して開けられ、鈕座には円圏を巡らせる。内区には獣像を五体分半肉彫りに彫り上げる旋回式鏡である。獣像の頭部と肩部・脚部は環乳状に突出し、弧状突線文が一重取り巻く。外区は内側から櫛歯文、複線波紋、鋸歯文が一重ごとに巡り、やや内反の縁へ至る（この外区文様帯は「鋸波櫛文」と区分される）。鏡体の周りには等間に６個の鈴が付く。鈴は球形で直径 1.4～1.6㎝ほどである。

〔鋳造・研磨〕　全体に良く鋳出されているが、獣像に鋳潰れが観察される。また鋸歯文帯と縁の一部に鋳傷がみえる（第２図Ｂ）。鈕や乳、鈴などの突出する部分には光沢があり、伝世時の摩耗と思われる。

〔同一文様鏡〕　この六鈴鏡は古墳時代倭鏡の中でも後期倭鏡に区分され、獣形鏡の中では獣形が簡略化された末期的な姿をしており、鈴鏡の中では乳文系に次ぐ類例が多い鏡群とされる。獣形鈴鏡は 20 面を超える出土例が全国で知られており、東国では愛知県名古屋市志段味大塚古墳五鈴鏡、静岡県静岡市浅間神社古墳六鈴鏡、静岡県浜松市三方原学園内４号墳七鈴鏡、千葉県君津市戸崎古墳群五鈴鏡、東京都大田区上沼部古墳六鈴鏡、群馬県高崎市観音塚五鈴鏡、栃木県宇都宮市牛塚古墳五鈴鏡、宮城県丸森町金山台町 20 号墳六鈴鏡などかある。なお、埼玉県では神川町新里古墳出土の五鈴乳文鏡と本例の２面が現在のところ確認できる鈴鏡のようだ。

本鈴鏡を含め多くの鈴鏡の鏡式は乳文鏡系・獣形鏡系などの本来の各倭鏡形式に収まり、その多様な鏡式が作られていることから、倭鏡製作の終末に近い時期に現れた倭鏡の一型式であり、その製作から副葬の期間はおよそ五世紀後半段階から六世紀前半までの期間と考えられている。なお、外区文様帯に「鋸波櫛文」を持つ倭鏡の類例には、群馬県高崎市観音塚古墳五鈴鏡、群馬県藤岡市付近出土五鈴乳文鏡、埼玉県行田市大稲荷古墳四獣鏡、埼玉県坂戸市三福寺１号墳乳文鏡、坂戸市入西石塚古墳四乳区画文鏡が挙げられ、何れの倭鏡も先の時期に収まる。本鈴鏡は獣形がなお立体をとどめ鋳上がりも上作であることから、五世紀末頃の製作・副葬と推定される。鈴鏡ではないが同様な獣形倭鏡は熊谷市中条の鎧塚古墳（ＴＫ 23～47 期）からも出土が伝えられる。

３．出土遺跡（古墳）について

六鈴鏡の出土地について、『東京人類学会雑誌』では「武蔵国比企郡大谷村大字庚塚」としている。この場所は現在の東松山市大谷大字庚塚に当たり、角川を隔て三千塚古墳群とは対峙する丘陵北斜面と谷地形部分を云い、谷津には「庚塚沼」が築かれるが古墳や古墳群は確認されていない。大字庚塚は、旧大岡村（現東松山市）にも所在し三千塚古墳群の第５・６支群に近い北尾根に連続した地区になる。庚塚の場所にはやや疑問が残るものの、三千塚古墳群からの出土は穏当のところだろう。

三千塚古墳群は比企丘陵の東北頂、雷電山より派生する尾根上に展開する古墳群で東松山市域の大半に９箇所の支群と一部西隣の滑川町に展開する支群も合わせ250基を超える比企地域最大の古墳群とされる。最頂部には５世紀初頭の築造で全長85ｍの前方後円墳「雷電山古墳」を筆頭に支群内に前方後円墳と円墳群が築かれていた。丘陵裾部から台地部には胄山古墳、とうかん山古墳、瀬戸山古墳群、野原古墳群なども展開し、さきたま古墳群と荒川を隔て対峙する中～後期の一大古墳群を形成している。

六鈴鏡の出土時期は文化年間（1804～1817）とされ、鏡を得た明治５年（1872）以降、根岸は三千塚古墳群一帯の古墳に見当を付けた大谷村花ノ木、串引周辺での古墳発掘を度々行い多数の埴輪類を蒐集していた。花ノ木、串引周辺は三千塚古墳群の第８支群に該当し前方後円墳長塚をはじめ直径30ｍ級の円墳群（第３号墳ほか）が築かれていた。昭和35・36年（1930・1961）に行われたゴルフ場造成時の発掘調査では、全ての調査古墳は暴かれた状態で出土遺物は僅かだったことが報告されている。

発掘調査された35基の古墳石室は、竪穴式石室・横穴式石室など埋葬施設は支群ごとに差異が認められ、出自を異にする集団の墳墓群との想定がなされている。第３、第８支群の調査結果では古墳群の年代は六世紀中ごろから七世紀前半と想定されたが、支群内の古墳様相はまだ未解明の部分が大きく今後の調査により古墳群の詳細な解明も予想される。なお、三千塚古墳群からはさきたま稲荷山古墳と同様に五鈴鏡を装着した女子埴輪が出土しており、鈴鏡を使用した祭祀を共有していたとも想像される。

４．結語　―鈴鏡再発見の意義―

鈴鏡などの鈴付遺物には、三環鈴、鈴杏葉、鈴釧など馬具、腕飾具類に製作され、五世紀後半から六世紀初頭にかけて武具類と共に副葬された例が多く見られる。この時期には機内王権の地方干渉が強まるとされ、さきたま古墳群のような上位首長より下位の中下層首長の階層まで武具・馬具・鏡鑑類の副葬が進むことに反映していると考えられている。北武蔵では稲荷山古墳から次代首長の時期に相当し、鈴付遺物を出土した小古墳群では、深谷市（旧岡部町）四十坂古墳から長方形板鋲留短甲・鈴杏葉が、深谷市（伝大里郡榛沢村）出土の鈴付腕輪（十鈴）が、東松山市市野川東耕地３号古墳から長方形板鋲留短甲が、三千塚古墳群第８支群３号墳から圭甲小札が、東松山市諏訪山１号古墳から鈴付腕輪（十二鈴）が、熊谷市（旧大里町）胄山所在古墳より五鈴釧が、熊谷市中条古墳群鎧塚古墳より獣形鏡が出土している。

なお、さきたま稲荷山古墳からは三環鈴と画文帯神獣鏡、鈴鏡装着の女子埴輪の出土がある。高崎市観音塚古墳は五鈴鏡を含め多数の副葬品を持つ上級首長層の前方後円墳で稲荷山古墳と同笵の画文帯神獣鏡を有している。機内政権より直接分与された品と想定される。先の小古墳群は中下層の首長層になり、さきたま古墳群首長傘下の中核をなす軍事集団として稲荷山古墳被葬者の配下に組み込まれていたことから、先の品々の分与に預かっていたと考えられる。彼らは50ｍ前後の前方後円墳、または直径30ｍほどの円墳に葬られたようで、三千塚古墳群中では第５支群の弁天塚古墳、第８支群の長塚古墳や第３号墳であったかもしれない。

想定に想定を重ねるが大谷出土とされる六鈴鏡はさきたま古墳群のおそらく稲荷山古墳の被葬者に連なる三千塚の集団中の下位層首長へ分与された品であったとおもわれる。大谷地区は比企丘陵でも屈指の溜池集中地帯で古墳造営に見る土木技術と共通するものがあり、地域の殖産興業に寄与した渡来系の人々が含まれていたと想定される。６世紀前半には武蔵国造の乱後さきたま古墳群の首長との間を割くように横渟屯倉が設置されるなどあたかも両者を牽制するかのような配置をみるが、とうかん山古墳や胄山古墳の首長墓、牛馬牧の伝承、須恵器・瓦生産の窖窯、東山道武蔵路ルートなどの遺跡の存在から一定の勢力を温存・維持していたと考えられる。

伝承のみとなっていた大谷出土六鈴鏡と根岸武香の関わり合いは、鈴鏡の実物が判明したことで、根岸の関わった考古学史が再確認され、遺跡と考古資料の絆が再びつながったことでさらなる地域研究が深まると思われる。根岸の聚成した資料『十種神宝図説』が「胄山文庫」の中にある。庚午の年（明治３年 -1870）に成稿したもので、五鈴釧（信濃国佐久郡赤岩村荒池山堀小塚所出）、六鈴乳文鏡（尾張国愛知郡白鳥古墳出土）の他、多数の鈴杏葉や祭具の手持ち鈴等を白描図にした帖で、鈴付遺物は古来より魂鎮祭に使用したものと考察を記している。胄山所在古墳採取の五鈴釧を蒐集していたことからも根岸は六鈴鏡の入手以前から鈴付遺物に関心を寄せていたらしく、この六鈴鏡を根岸の遺愛の品とされてきたことが良くわかる。

最後に、六鈴鏡の再発見に気づくきっかけをいただき、また報告の機会を用意していただいた、根岸家と國學院大學博物館教授内川隆志氏には深く感謝を申し上げます。

参考文献

№　著者・機関名　発行年　「論文名」･『書名』・巻号数・発行者

1　柴田常恵　1905「図版考説」『東京人類学会雑誌』第 207 号
2　高橋健自　1907『鏡と剣と玉』
3　考古学会　1920『十二考古家資料写真帖。第２回』
4　富岡謙蔵　1920「鈴鏡に就きて」『民族と歴史』第３巻第３号　日本学術普及会
5　後藤守一　1924『漢式鏡』雄山閣
6　梅原末治　1924「鈴鏡に就いての二三の考察（上）」『歴史と地理』第 13 巻第２号
7　森本六爾　1928「鈴鏡に就いて」『考古学研究』第２巻第２号　考古学研究会
8　三木文雄　1940「鈴鏡考」『鏡剣及玉の研究』考古学会編
9　田中　琢　1977「鐸・剣・鏡」『日本原始美術体系』
10　樋口隆康　1979『古鏡』
11　田中　琢　1981「古鏡」『日本の美術』№ 178　至文堂
12　山越　茂　1982「鈴鏡研究緒論―関東地方発見の鈴鏡を中心として―」『栃木県史研究』23　栃木県教育委員会
13　森下章司　1991「古墳時代倣製鏡の変遷とその特質」『史林』第 74 巻第６号史学研究会
14　大川麿希　1997「鈴鏡とその性格」『月刊考古学ジャーナル』№ 42　ニュー・サイエンス社
15　岡田一弘　2003「鈴鏡の画期」『富山大学考古学研究室論集　蜃気楼　―秋山進午先生古希記念―』六一書房
16　國學院大學考古学資料館　2009『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅲ　仏像・仏具・考古資料』國學院大學研究開発推進機構学術資料館（考古学資料館）
17　八木あゆみ　2009「鈴鏡を巡る諸問題」『故事』天理大学考古学研究室紀要４　天理大学
18　下垣仁志　2011『倭製鏡一覧』立命館大学考古学資料集４　立命館大学
19　内川隆志　高橋智也　2012「静嘉堂文庫所蔵　松浦武四郎旧蔵資料の人文学的研究（古墳時代金属器編）」『國學院大學学術資料館紀要』第 28 輯　國學院大學学術誌資料館
20　金井塚良一　2012『三千塚古墳群』東松山市文化財調査報告書第 29 集　東松山市教育委員会
21　馬淵一輝　2017「志段味大塚古墳出土鈴鏡から見た後期倭鏡」『志段味古墳群Ⅲ―志段味大塚古墳の副葬品―』名古屋市文化財調査報告 94
22　岩本　崇　2018「旋回式獣像鏡系倭鏡の編年と生産の画期」『古天神古墳の研究』島根大学考古学研究室調査報告第 17 冊

（あらい　ただし：熊谷市立江南文化財センター）

平成 29 年度科学研究費助成事業　基盤研究 B　課題番号 17H02025

『好古家ネットワークの形成と
近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅳ

令和 3 年 2 月 28 日発行

編　集　内川隆志
連絡先　〒 150 － 8440　東京都渋谷区東 4 － 10 － 28
國學院大學学術資料センター研究室
TEL　03-5466-0249　　E-mail　takasi@kokugakuin.ac.jp
WEB サイト　http://hcra.sakura.ne.jp/hvsiebold/
印　刷　株式会社　秀飯舎